



芝原尾根遺跡

(第1・2次発掘調査)

平成7・8年度県営担い手育成基盤整備事業深山地区に先立つ緊急発掘調査報告書

1997. 3

長野県原村教育委員会

芝原尾根遺跡

(第1・2次発掘調査)

平成7・8年度県営担い手育成基盤整備
事業深山地区に先立つ緊急発掘調査報告書

1997. 3

長野県原村教育委員会

序

このたび平成8年度の芝原尾根遺跡の発掘調査報告書を刊行することとなりました。

発掘調査は「県営担い手育成基盤整備事業深山地区」に先立って、諏訪地方事務所の委託と、国庫および県費から補助金交付を受けて原村教育委員会が実施したものであります。

芝原尾根遺跡は、縄文時代の陥し穴を数多く発見した遺跡で、その範囲は当初考えていたよりも極めて広大なものとなりましたが、関係各位のご協力によりその全容を把握することができ、当時の狩猟活動を研究する上において貴重な資料を提示することができたものと思っています。

このたびの発掘にあたり、諏訪地方事務所土地改良課の方々のご配慮、長野県教育委員会のご指導、長野県埋蔵文化財センターをはじめ発掘にかかわる多くの皆様のご協力に深甚なる謝意を表する次第であります。

発掘現場では、長野県埋蔵文化財センター 調査研究員 澤谷昌英氏の多大のご助力により、失われていく貴重な資料を記録に残すことができました。また、発掘調査報告書刊行にいたる過程において、お世話いただいた関係各位にたいし厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

原村教育委員会
教育長 大 館 宏

例 言

- 1 本報告は「平成7・8年度県営担い手育成基盤整備事業深山地区」に先立って実施した、長野県諏訪郡原村中新田地区に所在する芝原尾根遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、平成7年度分については諏訪地方事務所の委託金で12月11日から21日まで行われた。平成8年度分については諏訪地方事務所の委託と、国庫および県費からの発掘調査補助金交付を受けた原村教育委員会が平成8年4月24日から8月13日にかけて実施した。
- 3 遺構の実測は、平成7年度については石川美樹が行い、平成8年度については久根穂則・小林りえ・坂本ちづる・進藤郁代・津金喜美子・林史子・澤谷昌英が行った。
- 4 平成8年度の遺構・調査区の単点測量と航空写真は株式会社こうそくに委託実施した。
- 5 遺構の写真撮影は、平成7年度については石川が行い、平成8年度については石川・澤谷が行った。
- 6 石器の実測は澤谷が行った。
- 7 木製品の实測・トレースは賛田明が行った。
- 8 縄文土器片の拓本は澤谷が行った。
- 9 遺構のトレースは朝日治郎・小林・坂本・進藤・津金・林・石川・澤谷が行った。
- 10 遺物のトレースは朝日・坂本・林・澤谷が行った。
- 11 遺物の写真は石川が撮影した。
- 12 小竪穴一覧表は石川・小林が作成した。
- 13 執筆は、I-1・2を石川、IIを平出一治、III・IV・VI-2・3・VIIを澤谷、I-3・V・VI-1を澤谷・石川が行った。
- 14 本書の編集・校正は石川・澤谷が行った。
- 15 本報告に係わる出土遺物、諸記録は原村教育委員会が所蔵・保管している。

発掘調査から報告書作成にわたって、大竹憲昭・谷和隆・賛田明の3氏には多大な御協力を頂いた。また白田武正・岡村秀雄・小林俊一・原明芳・廣瀬昭弘の諸氏に御指導・御助言・御協力いただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
I 発掘調査の経過	1
1 発掘調査に至る経過	1
2 調査組織	2
3 発掘調査の経過	2
II 遺跡の位置と周辺の遺跡	4
III 調査方法	7
IV 遺跡の基本層序	8
V 調査の概要	9
VI 遺構と遺物	23
1 小 竪 穴	23
2 倒木痕を利用した遺構	58
3 遺 物	62
VII ま と め	66
1 倒木痕の調査について	66
2 落とし穴について	67

引用・参考文献

写 真 図 版

報 告 書 抄 録

I 発掘調査の経過

1 発掘調査に至る経過

農業人口の減少と高齢化は全国的にみられる現象であり、この原村も例外ではない。農業戸数がおよそ6割に達する原村では、次世代のことを考えれば農業機械の大型化は必須条件である。そのために、基盤整備はどうしても避けて通ることかできない事業である。そのための県営担い手育成基盤整備事業である。

原村の中新田地区で計画されている「県営担い手育成基盤整備事業深山地区内には、標高が高いためと推察されるが、阿久遺跡の存在する柏木地区にみられるような遺跡の宝庫といった観は少ない。特に県道の道北に存在している遺跡は、本芝原尾根遺跡だけである。

村誌によると

(68) 芝原尾根遺跡（中新田）

「中新田地区の南方に位置する遺跡で、昭和54年度分布調査で縄文早期の押型文土器破片と平安時代の土師器の破片を採集しているが、その分布範囲は狭い。昭和57年には遺跡の西側が、発掘調査されず土取りが行われ一部が破壊された。」とある。

芝原尾根遺跡は基盤整備の計画の中で今年度の発掘調査を行うため、整備の済んだ基盤の中で小島のように取り残されていた。しかし平成7年度に、来年度耕作用の水路を通したいとの要望が農政制より上がり、長野県教育委員会の指導のもと原村教育委員会が工事に立ち会って西側の一部を水路のために削った。

また道路を通すため、不足する土取りのために同じ尾根筋と考えることのできる西側の尾根が削られ始めた。急遽工事を止めて尾根の部分で踏査してみたところ、縄文時代のもつとみられる黒曜石製の鎌と黒曜石の破片をいくつか発見した。このため急遽開いた平成7年10月27日の保護協議の席上で、長野県教育委員会文化課、諏訪地方事務所土地改良課、原村教育委員会の三者間で遺跡の拡大が確認され、西側の尾根も同じく芝原尾根遺跡として、農道を通す部分については平成7年度中に諏訪地方事務所の委託金のみで行うことが合意された。その他の部分については平成8年度の発掘調査を合意された。

平成7年度、原村教育委員会は諏訪地方事務所から緊急発掘調査の委託金を受けて、12月11日から12月21にわたり緊急発掘調査を実施した。

平成8年度、原村教育委員会は国庫および県費から発掘調査補助金を受け、また諏訪地方事務所から緊急発掘調査の委託金を受け、5月7日から8月13日にわたって緊急発掘調査を実施した。

2 調査組織

芝原尾根遺跡発掘調査団名簿（平成7年度）

団 長	大館 宏（原村教育委員会教育長）				
調査担当者	石川 美樹				
調査参加者	鎌倉きふみ	小池 芳久	津金喜美子	中村きみゑ	日達今朝江
事 務 局	原村教育委員会	平林今朝二（教育次長）		大口美代子（庶務係長）	
	宮坂 道彦	伊藤 佳江	平出一治（文化財係長）	平林とし美	
	石川 美樹				

芝原尾根遺跡発掘調査団名簿（平成8年度）

団 長	大館 宏				
調査担当者	石川 美樹				
調 査 員	澤谷 昌英				
調査参加者	秋山 洋一	朝日 治郎	鎌倉きふみ	吉川 幸子	久根 種則
	小池 英男	小池 稔	小平 貴英	小松 芳久	小林 多美
	小林 ミサ	小林 りえ	小松 弘	五味八代江	坂本ちづる
	清水 太助	清水としみ	清水 正進	清水美由紀	清水 洋介
	進藤 郁代	関戸 朋寛	田中 初一	津金喜美子	中村きみゑ
	野明 義央	西沢 寛人	林 史子	日達今朝江	宮坂けん子
	宮坂 長一	宮坂とし子	森山源司		
事 務 局	原村教育委員会	中村 正英（教育次長）		大口美代子（庶務係長）	
	伊藤 佳江	平出 一治（文化財係長）	平林とし美	石川 美樹	
	澤谷 昌英（県派遣主事）				

3 発掘調査の経過

平成7年12月11日 重機によって表土が剥がれており、D～F区（西尾根南端）の検出作業に入る。基準点を設定する。

15日 5基の小竪穴の検出写真を撮影し、遺構の検出作業を継続。

16日 遺構検出作業を進めつつ、小竪穴1～5を精査する。

18日 遺構検出作業中、排土中より旧石器とみられる黒曜石を発見。

19日 小竪穴1～3を完掘し、完掘写真を撮影する。ユニット・ブロックの検出作

業にかかる。

- 20日 浜崎建設のご厚意により、重機でユニット・ブロック等検出のためのサブ・トレンチ1～6を入れ、トレンチ内を検出するが旧石器の発見には至らない。
- 21日 小竪穴4・5を精査し終え、完掘写真の撮影を行う。調査区全体を図化し、レベルを計測し、撤収する。

平成8年5月7日 発掘準備をはじめ。

- 8日 テントを設営し、機材を搬入する。H区で重機による表土剥ぎをする。
 - 10日 H区の遺構検出作業に取り掛かる。落ち込みが何基かみられる。
 - 13日 H区で小竪穴約10基を検出。検出面から石鏃が2つ出土。
 - 14日 J～L区（東尾根）に重機を入れ、表土剥ぎをはじめ。土器片や黒曜石片が僅少ながみられる。
 - 17日 委託業者の株式会社こうそくが委託してH区に2基、J～L区に2基のベンチマークを打設する。L区北斜面に2m四方のグリッドを等高線に沿って設け、手掘りで遺構の有無の確認をはじめ。遺構はない。
 - 21日 K区の南急斜面において落とし穴らしき落ち込みが複数検出され、表土剥ぎ範囲を斜面の更に下方に拡げる。
 - 23日 H区で基本土層の観察と図化を行う。
 - 24日 遺構番号を登録する。東尾根の小竪穴の数が100基を越える。L区北斜面の16のグリッドを下げ終える。
 - 27日 J～L区（東尾根）の検出を終える。小竪穴群の検出状況写真を撮影し、掘り下げに移る。断面図・断面写真・完掘写真・平面図を随時とりはじめる。重機による表土剥ぎはE区へ移るが、山林だったため切り株に阻まれ、難航する。
 - 29日 K区で7基の落とし穴の底部から坑底小孔がみつかる。
 - 31日 西尾根H区と東尾根のほとんどの小竪穴群を完掘し終え、調査は平面実測のみを残す。倒木痕や木の根痕と攪乱で、小竪穴に欠番が多数生じ、東尾根の最終的なその数は92基となる。
- 6月5日 委託業者株式会社こうそくがH区と東尾根のラジコン空撮写真と単点測量を行う。柏木集落の作業員が合流し、倍の人数で遺構検出作業を行う。重機も2台を投入し、西尾根の表土剥ぎを進める。
- 12日 H区と東尾根の平面図をとり終え、H区以東の調査を完了する。
 - 27日 株式会社こうそくがB～G区にベンチマークを8基打設する。
- 7月4日 小竪穴131以降の遺構番号の登録をはじめ。
- 15日 遺構検出作業と番号登録を終了し、落とし穴等主な小竪穴から検出状況写真

の撮影にかかる。落とし穴の累計が、東尾根も含め31基となる。

- 16日 小竪穴群の掘り下げに入る。
- 19日 小竪穴群の断面図・断面写真を随時とりはじめる。
- 25日 小竪穴群の完掘・完掘写真撮影も順次すすめる。
- 8月1日 小竪穴群の完掘をほぼ終え、航空写真の準備をする。株式会社こうそくに委託して西尾根の単点測量を行う。
- 2日 B～G区のラジコン空撮写真の撮影を実施し、単点測量の残りを行う。旧石器の調査としてE・F区にトレンチを設定し、手掘りで下げはじめる。
- 8日 旧石器トレンチでは結局何も出土せず、礫群は成さないことを確認する。焼土跡1～4を半載し、断面写真を撮る。小竪穴228・389（落とし穴）の坑底小孔に残存していた木質を取り上げる。テント・機材の撤収をはじめる。
- 9日 焼土跡1～4の断面図をとる。
- 13日 集石炉を完掘し、すべての小竪穴の平面実測を終える。調査を完了する。

II 遺跡の位置と周辺の遺跡

芝原尾根遺跡(原村遺跡番号68)は、中新田区の南方、中央自動車道の諏訪南インターの東方約3000m、長野県諏訪郡原村15991番地付近に位置する。

このあたりはハッ岳西麓のほぼ中央に位置し、東西に細長く発達した大小様々の尾根がみられる。その一つである六部塚川と稗田川にはさまれた尾根上から南斜面が遺跡となる。尾根幅は広く、地目は普通畑と山林で地味は良い。遺跡の西側は古くから宅地化が進み、東、南、北側の三方は水田で、水田の中に遺跡の立地する尾根だけが取り残されていた状態であった。標高は1090～1140mを測り、原村における遺跡の高度限界が1200m前後であることから、その限界に近い高所に位置する。

本遺跡の発見は、昭和54年度に長野県教育委員会が実施した「ハッ岳西南麓遺跡群分布調査」の折に、縄文時代早期の押型文土器破片と平安時代の土師器の破片を採集したことによるが、そ



第1図 原村城の地形断面模式図(宮川-芝原尾根遺跡-赤丘ライン)

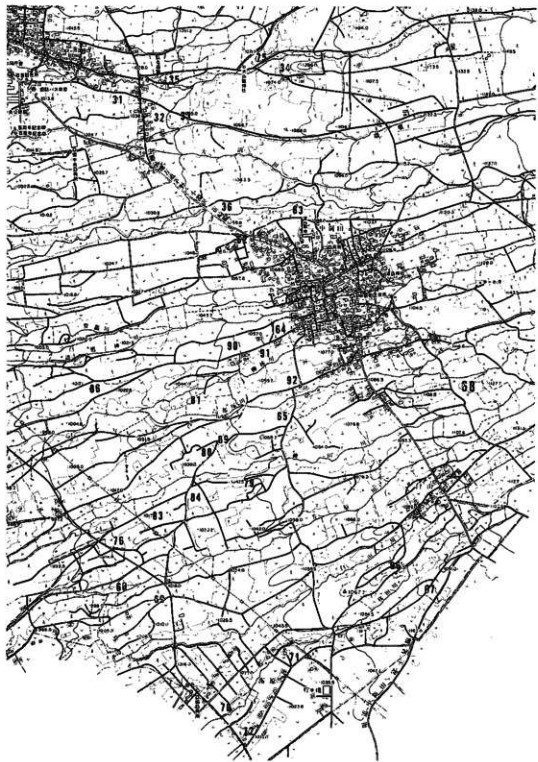
の後、昭和57年には土取りのため遺跡の一部は発掘調査がされないまま破壊されている。

この付近一帯は、八ヶ岳西南麓の中では遺跡の希薄地域であるが、第2図および表1に示したように、縄文時代を中心とした遺跡が分布している。しかし、その多くの遺跡はすでに「県営畑地帯総合土地改良事業御山地区」により消滅している。事前に実施した緊急発掘調査の結果をみると、比較的小規模の遺跡が多いようである。ここでは、本遺跡に関係が深いと思われる縄文時代の遺跡に目を向けてみると、早期の押型文土器が発見されている浅間沢遺跡(60)、早期の押型文土器と中期末葉の住居址が発見された南原西遺跡(70)、やはり早期の押型文土器、条痕文系と絡条体圧痕文系土器と中期中葉の住居址が発見された堤之尾根遺跡(81)などがある。

表1 芝原尾根遺跡と付近の遺跡一覧

○は遺物発見 ◎は住居址発見

番号	遺跡名	旧石器	縄文				弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
			草	前	中	後							
31	中尾根								○				
32	大横道上				◎◎				○				昭和42・51年度発掘調査
33	ツナバ				◎								
34	折の木				◎◎								
35	臥竜				◎◎								昭和33・35・36・45・57・平成3・7・8年度発掘調査
36	小弘沢				○								
60	浅間沢		○		○								
62	庚申				○								
63	裏の尾根				○								無原石棒
64	古塵敷				○								
65	梨の木沢		○		○				◎		○		平成元年度発掘調査 消滅
66	追分沢				○				○				
67	二枚田				◎								一部破壊 有原石棒
68	芝原尾根		○	○	○				○				平成7年度立ち会い、7・8年度発掘調査
69	赤羽												打製石斧・石鏃
70	南原西		○		◎								昭和59年一部破壊
71	南原東				○				○				平成4年度立ち会い調査
72	徳久利	○			◎◎								昭和25~27・59・61・平成5年度発掘調査
75	山の神上				○◎								昭和45・57・平成7年度発掘調査
76	御射山		○	○	○				○	○	○		昭和59・60・平成4年度発掘調査
79	中御射山東				○								昭和59年度発掘調査 消滅
80	御射山沢				○								昭和59年度発掘調査 消滅
81	堤之尾根		○	○	◎				◎				平成2年度発掘調査 消滅
83	花表原				○								昭和59年度発掘調査 消滅
84	中御射山西				○				○	○			昭和59年度発掘調査 消滅
85	箕手久保				○					○			昭和61年度発掘調査 消滅
86	判の木尾根				○								昭和62年度発掘調査 消滅
89	梨の木沢西									○			平成元年度発掘調査 消滅
90	中道通				○								平成元年度発掘調査 消滅
91	古塵敷西				○				○				平成2年度発掘調査 消滅
92	御射山道北				○				○				平成2年度発掘調査 消滅



III 調査方法

発掘調査の対象は、平成8年度担い手育成基盤整備事業深山地区にかかる遺跡全域におよび、その範囲は極めて広い。

平成7年度の調査対象面積は約800㎡で東尾根の南端部である。調査に先立ち、東西南北（磁北）に軸を合わせた仮グリッドを設定した。遺構の検出作業は、ローム層上面まで重機により表土を除去した後行い、順次精査を実施した。調査の途中、排土から採取された黒曜石片から旧石器の存在の可能性が生じ、ローム層中に7条のグリッドを設定したが、結局それ以上の発見に至らなかった。平成8年度の調査と合成できるように、平成8年度の調査区に仮グリッドの延長杭を打設した。

平成8年度の調査面積は20000㎡にもおよんだ。7年度の調査から遺構密度が疎であり、遺物包含層及び遺構検出面より発見される遺物が希有であること、調査区が広大なうえに起伏に富むことから、調査に先立ってのグリッド方眼杭は敢えて打設せず、遺構の検出状況により調査法を検討することとした。従来の踏査と旧年の調査から、遺跡の性格が集落跡としての予測はたまた落とし穴等の小竪穴を主体とするため、局所的なトレンチやグリッドによる遺構確認では、遺構を跨いで取りこぼしてしまうという判断と、ローム上を覆う黒色土が予想外に浅いうえに、20世紀以降の耕作がローム上面まで達している箇所も少なくないことから、調査区の表土をローム上面まで重機で全面的に剥ぎとることを決めた。

結果、グリッド設定は図上操作のみとし、遺構・遺物の正確な位置は業者委託による単点測量を導入した。グリッド設定は、遺物や遺構の位置を検索するうえで報告上欠かせず、従来の原村の設定方式を踏襲して、東西方向には50mの大地区を国家座標 $Y = -23180.000$ 線をA区の西端として東へ向かってA区・B区・C区・D区というように区割りし、その大地区の中を更に 2×2 mの小地区（グリッド）に分割した。このグリッドの東西方向は西から東へA～Yまで大地区を25分割し、南北方向は遺跡の中心と思われる国家座標 $X = -5960.000$ 線から南へ2m幅を70とし、それを基準に南方向は69・68・67というように南に行くにしたがって小さくなるように、北方向は71・72・73と大きくなるように算用数字を振った。このグリッド設定は、VIII系国家座標原点に基づき、国家二等三角点以上の精度を有する公共水準点より導いた。

測量は手測とトータル・ステーションを折衷する変則方式で、個々の遺構は任意座標により作業員が手測し、遺構のセクション・ポイントは業者委託による単点測量で拾い上げて両者を机上合成して遺構分布図を作成している。小竪穴は、坑壁と坑底の区別が不明瞭なものも全て下端（したば）を図化し、一部の例外を除き全ての小竪穴の断面図を絶対高で実測した。単点測量はセクション・ポイントの他、ドット上げ遺物及び手掘りグリッド・手掘りトレンチの輪郭や調査

区の輪郭についても適用した。また、測量とは別に遺構がほぼ完備状態になった段階で、委託により遺跡全景と調査区全景をラジコン空撮した。

旧石器の調査は、7年度に旧石器の疑いのある黒曜石片が出土したと考えられるE区において、70以南のグリッドについてローム漸移層中で重機による表土剥ぎを止め、ローム上面まで手掘りで注意深く下げたうえに、礫群が想定される位置としてD～F区、大形の黒曜石片と旧石器の疑いのある石器が出土した地点の周辺や傾斜が始まる尾根の平坦部のへりを重点的に、ローム上面から30cm前後下のローム層中まで8～12トレンチ（第7～9図）を手掘りで注意深く下げた。結果、礫群は発見に至らなかった。

IV 遺跡の基本層序

遺跡の調査に入った時点での調査区の土地利用状況は大半が山林で、現耕の畑地として機能していたのは、西尾根ではF区80以南とG・H区、東尾根ではJ・K区の南斜面である。これらのうち、ローム層まで耕作が深く達したF区80以南とG区の南側、J・K区南斜面の上半は耕作土を除去するとハードロームが露出しているという有り様であった。表土を剥ぐ前には遺跡の遺存状態は良好であろうと予測した山林部分にも、山林以前には桑畑等として機能していた区域が少なくなく、思いもよぬ山林下に攪乱が達している箇所が少なからずあり、B～E区にその傾向が顕著だった。地元の方の話を聞くと、畑を廃棄して林野になってから70年前後が経過しているのではないかとのことであった。また、C～K区の尾根頂部にかけ、溝状の攪乱が延々と走っていた。

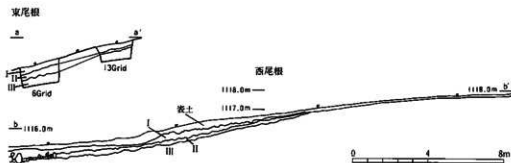
しかしながら、調査区の過半の層序は比較的安定した堆積状況にあり、尾根上の平坦部では黒色土が薄く、傾斜地の端部では黒色土が厚い傾向はあるが、局部的に特殊な土層が確認されたところはなく、調査区全体を通じて一律な堆積状況にある。

観察結果を記す（第3図）。文中の色調とパーセンテージは財団法人日本色彩研究所の『新版標準土色帖』を指標として、調査担当者が肉眼で選定した。

- （現耕土）： 攪乱と同格に扱い得る耕作土で、時おり石灰の顆粒が混入する。
- I：黒色土 尾根頂部で7～15cm程度、尾根端部で50～70cm程度の堆積があり、平均的には20～30cm程度の厚さである。よく腐植が進行した土で、腐植の進行具合によって漆黒色～黒褐色を呈するものを含む。団粒状の構造で、水分を帯びると粘性が増す。φ～3mmのローム細粒を2%以下含有する。
- II：黒褐色土 腐植の進行が不十分な土で、ロームをブロック状または斑状に25～40

%含有する。ロームの含有具合で暗褐色も示し、ロームから漸移してロームと不可分な状況もある。

III : ローム層 褐色



第3図 基本層序 (1:200)

V 調査の概要

芝原尾根遺跡には東尾根と西尾根がある。尾根筋は同一だがH区とL区にそれぞれピークがあり、その間がいったん窪まる原地形をもっている。この窪まったところには更に農道が切り、削平されて畑地が造成されたので、東尾根と西尾根は余計に寸断されてしまっていた。遺構分布図において、H区東半からJ区西半にかけて全く調査区がないのは、既に原地形が存しないためである。従前から芝原尾根遺跡と呼称されてきたのは東尾根であったが、結果的には西尾根の方が広大な調査面積になった。同一の尾根筋にありながらも別々のピークをもつために別の尾根として捉えられ、このような場合は通常、異なる遺跡名を登録する。異なる遺跡名については検討したが、調査の結果、遺跡の性格・遺構の在り方から一連の狩り場としての様相があるため、現時点では両尾根とも芝原尾根遺跡として報告することを決めた。

検出された遺構は次のとおりである。

東尾根：	落とし穴……………	7基	
	その他の小竪穴……………	85基	
西尾根：	落とし穴……………	24基	
	集石炉……………	5基	
	その他の小竪穴……………	294基	小竪穴合計…………… 415基
	倒木痕上につくられた集石……………	1基	
	倒木痕を利用した焼土跡……………	4基	

小竪穴はローム上面において、下位に落ち込みをもつものの総称で、遺構検出時点で既に番号登録した。このため内容的にはさまざまな性格のものがあり、明らかに人為的な掘り込みをもつものから、不明瞭・不定形で浅く、遺構なのか怪しいものまであり、落とし穴・集石炉をも含む。これらのうち実に97.5%は何も出土せず、大方は恐らく縄文時代であろうと思われるが、時期を明確にすることはできない。

検出された遺物は、それらを東西の尾根別、土器片と石器・剥片、遺構内のものと検出面のもの、旧石器時代と思われるものと縄文時代のもの、といった分類を一切しないで整理箱に収めると1箱で収まってしまう程度の少量である。

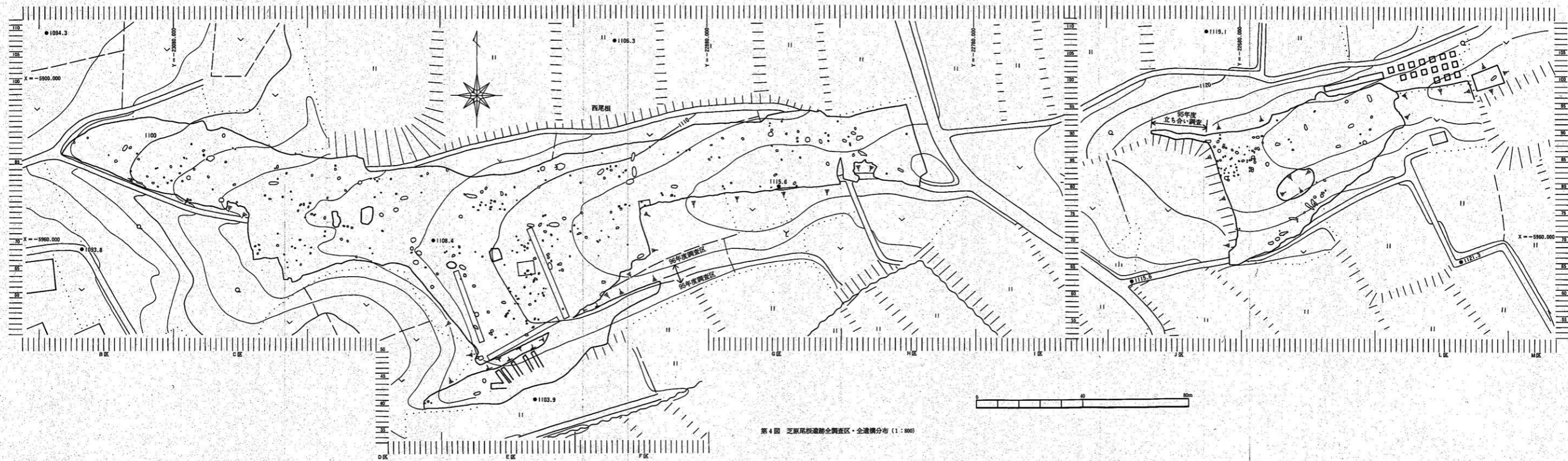
縄文土器片は東尾根の遺構内外で20片強、西尾根の遺構内外で10片に満たず、しかも大半が無文か摩耗著しく時期が不明確である。時期の分かる施文のある土器片には中期中葉のものと後期初頭のものがある。過去の表面採集では押型文土器片が見つかったらしいが、調査では早期の土器片は1片も見つけ得なかった。

石器は全て遺構外で見つかった。石皿片が東尾根で1、凹石が東西の尾根各1、折れた打製石斧が東西の尾根各1、石鏃が東尾根1・西尾根4で、旧石器と考えられるものは、西尾根E・F区に限られ、スクレーパー2、使用痕のある剥片1、石核1がある。縄文早期土器片は見つからなかったが、石鏃5点中3点は縄文早期に見られる形状である。

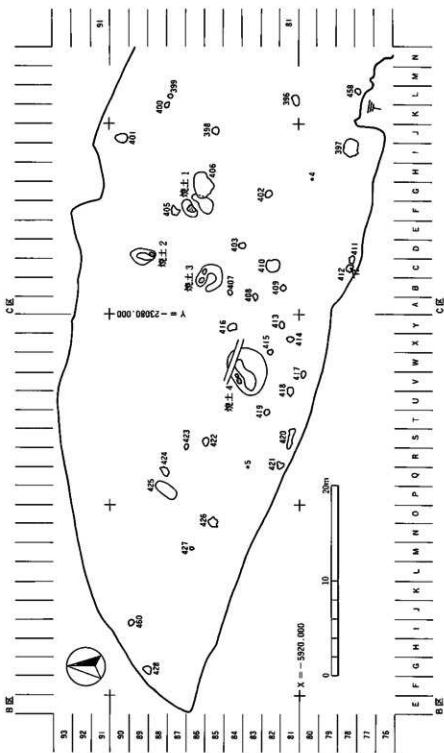
黒曜石剥片は、東尾根で遺構内外から17片、西尾根ではすべて遺構外から22片が見つかり、西尾根の半数は大きさや特質から旧石器時代のものと考えられる変革峠産であり、ほとんどが7年度調査のE区より、C区・F区でも各1点が見つまっている。しかし、旧石器の疑いのあるものは礫群を構成するような出土状況にはない。

木製品では、小竪穴228・389の両落とし穴で坑底小孔内に木質の先端部分が残存していた。小竪穴228のものは木片に過ぎないが、小竪穴389のそれは、杭状に加工された先端部の形状がそのまま残っている。

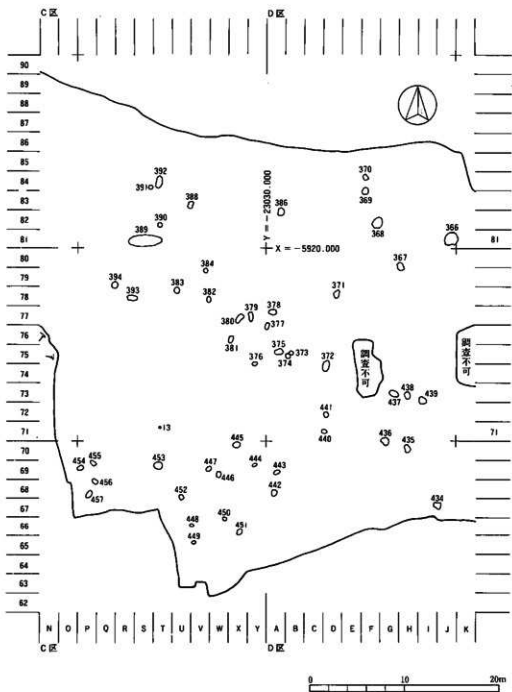
遺跡を概観すると、芝原尾根遺跡は集落遺跡ではなく、“狩猟の場”としての性格が強い。調査前は、E・F区の尾根平坦部にはもしかしたら……と考えたが、集落を営む標高限界を超えていたらしく、竪穴住居跡は皆無であった。唯一の集落的なものといえば、東区で見つかった石皿片ぐらいのものである。落とし穴・遺物の散在状況はまさに狩猟の場であり、早期様の石鏃の発見、中期中葉の土器片を出土した落とし穴の存在、落とし穴同士の重複や形状の相違といった事象から、狩猟の場としてもかなりの時間幅をもっていると考えられる。



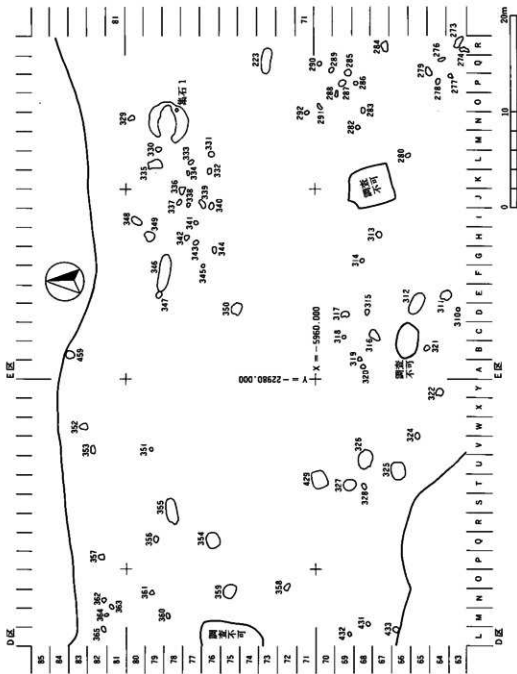
第4図 芝原尾根遺跡全調査区・全遺構分布 (1:800)



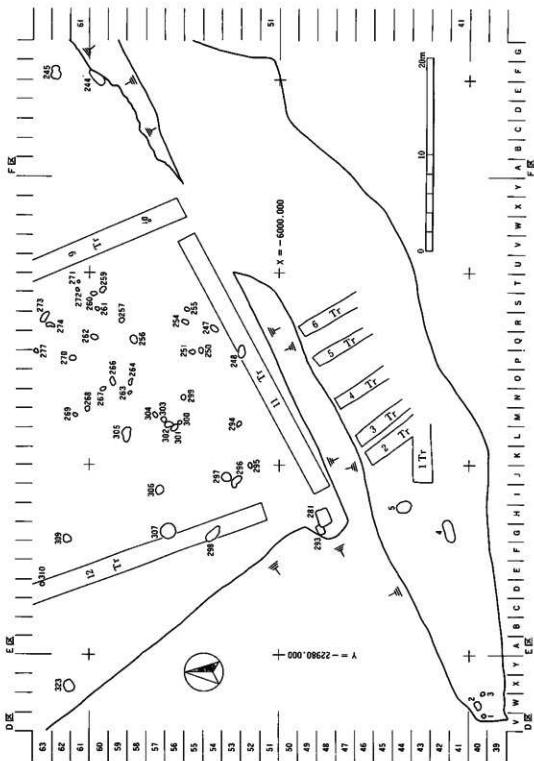
第5图 B·C区遗物分布(1:400)



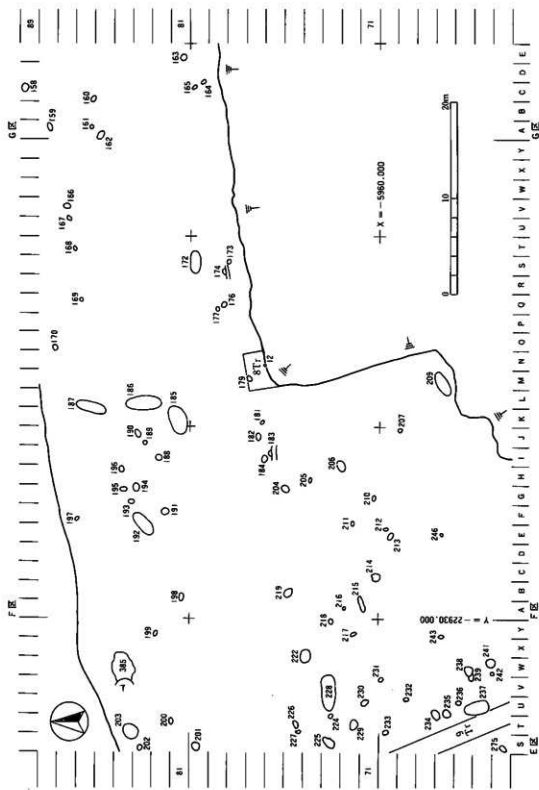
第 6 图 C · D 区道槽分布 (1 : 400)



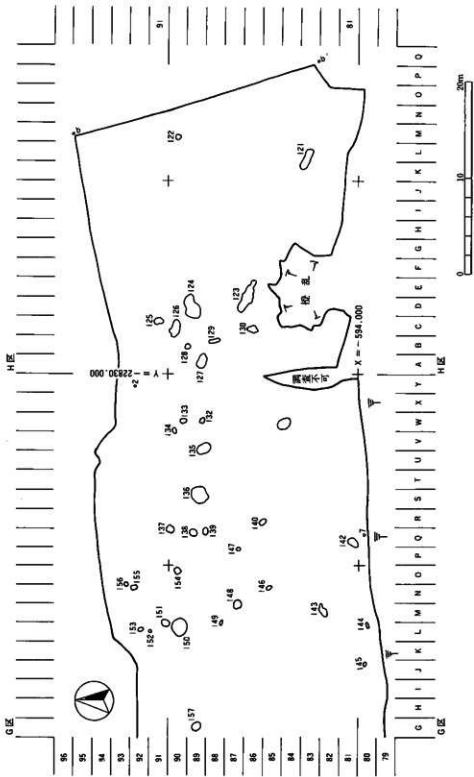
第7圖 D・E区遺構分布 (1:400)



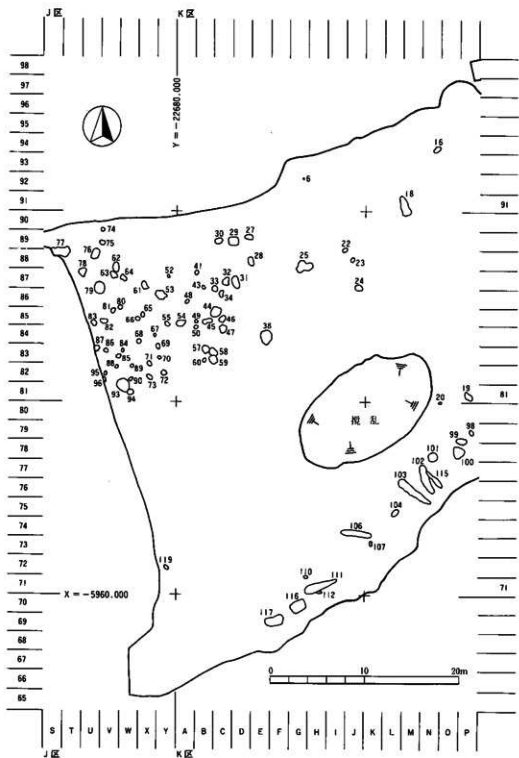
第8圖 D·E·F区遺構分布 (1:400)



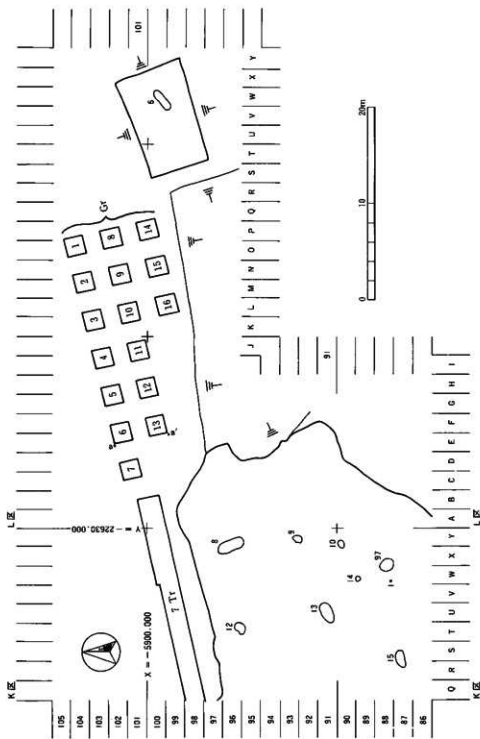
第9图 E·F·G区道線分布 (1:400)



第10图 G·H区道線分布 (1:400)



第11圖 J・K区遺構分布 (1:400)



第12図 K・L区区画分布 (1:400)

VI 遺構と遺物

1 小 豎 穴

小豎穴はいわゆる“穴”であり、先述のように検出面において下方へ落ち込みのあるものを総称している。これらは、検出時点において順次登録し、形状や用途によって呼称を変えることはしなかった。このため様々な性格のものを含み、調査時点で攪乱や倒木痕と判明したもの、穴の体を成さなかったものは欠番とした。なお、極めて攪乱的な埋土をもつものでも、攪乱を証する物（ガラス・ビニール・プラスチック・石灰の顆粒など）が出土しなかった場合は、そのまま小豎穴としてある。小豎穴数は415基にもなるが、これらのうち2.5%にしか遺物の出土がなく、ほとんどが積極的な時期判定はできない。

415基のうち落とし穴と屋外配石炉を中心に43基を図化し、以下に説明を加える。小豎穴一覧表から読み取れる情報は極力記述しない。断面図中の土層注記は簡略化しており、ローマ数字のⅠ～Ⅲは基本層序に対応する。例えば「Ⅰ（Ⅲφ～30を5%）」は、基本層序Ⅰを基調土とし、Ⅲ（ローム）のブロック（φ30mm以下）を5%含有する、と読む。なお落とし穴において、図版と写真図版で坑底に穿たれた小孔の数に相違が見られる場合があるが、これは人為性に疑いのあるものや誤掘したものを、写真はそのまま撮影し、実測では図化しなかったためである。

小豎穴4（第13図）

第1次調査区の西尾根E区南斜面にある落とし穴で、平面長円形だが、坑底で長方形となる。壁はやや屈曲する。下層にローム塊の崩落堆積、上層にⅡの埋没がある。長軸は等高線の方角である。坑底を十分に精査したつもりであったが、坑底小孔は見つからなかった。

小豎穴5（第13図、写真6）

第1次調査区の西尾根E区南緩斜面にある落とし穴で、円形に近い長円形状だが、坑底は中くびれの長方形となる。壁は上端で漏斗状に開き、下方ではほぼ垂直である。坑底小孔は1基のみある。長軸は斜面の方角にある。

小豎穴6（第14図、写真7）

第1次調査で試掘し、第2次調査で完掘・図化した。遺跡最東端の東尾根L区にあり、当遺跡で最も標高の高い遺構である。尾根頂部にある落とし穴で、検出面における平面形および坑底形とも長円形であり、壁はほぼ垂直に下がる。壁際にローム塊、中央上部にⅠ、その間にⅡ、最下

層に薄い粘質の腐植土が堆積する。坑底小孔は3基を基本として、再利用による打ち直しのため合計で5基があったが、いずれも浅い。長軸方向は尾根の方向である。

小竪穴8 (第14図、写真8)

東尾根K区の尾根頂部から北斜面のはじまる辺りにあり、長軸が斜面の方向にある落とし穴で、平面形は長円形だが、坑底は溝状の長方形である。壁は途中で屈曲し、角度が急になるタイプで、両端の坑壁には石器による掘削痕が生々しい。坑底小孔は5基ある。坑底から壁際には ϕ ~50mmのローム・ブロックや腐植の進行途上土が堆積し、残りを埋める。

小竪穴13 (第15図、写真9)

東尾根K区の尾根頂部尾根方向にあり、検出面で長円形、坑底ではもっと細まった長円形を成す落とし穴である。壁際には崩れとしてよく報告されるローム塊がある。壁はほとんど屈曲しないで傾斜する。坑底小孔は2つで、その中間にごく浅いくぼみがある。

小竪穴38 (第15図、写真46)

東尾根平坦部の南端にあり平面形は上下とも円形で、断面形は壘状を成す。周縁部に若干のロームを含んだIが単層で堆積する。貯蔵穴か。

小竪穴102・115 (第16図、写真10・13)

落とし穴の重複である。東尾根K区の尾根端部に近い急な南東斜面にあり、115が102を切る。何れも平面形は溝状に細長く、坑底も同様で、壁は垂直に近い傾斜である。102短軸断面では、バミスとローム塊が両サイドに貼り付き、その間を崩落を含む混交土が埋め、最上層にIが溜まる。115も両サイドにローム塊がある。102の両サイドのロームは疑似坑壁を成し、これを完掘して調査を終えそうになった。いずれも最下層は黒色の腐植土が薄くあった。坑底小孔は102が5つ、115が6つだが、115は102と重なる部分に更に在ったかもしれない。何れも斜面の方向に細長い。

小竪穴103 (第15図、写真11・13)

落とし穴である。東尾根K区の尾根端部に近い急な南東斜面に在り、平面形は溝状で斜面の方向に細長い。壁はほぼ垂直に近く、短軸断面ではローム塊が両壁に貼り付く。北西端の壁面は石器の刃の掘削痕が見事に残っていた。坑底小孔は7つある。

小竪穴106 (第17図、写真12)

東尾根K区の尾根端部に近い南東急斜面に在り、細長い落とし穴である。壁はほぼ垂直だが、

上方でやや解放する。坑底は斜面と同じ傾斜をもたず、中央で急傾斜を作って上下2段を作り出している。仕掛けを設置する際の作業の容易さを考えたものか。坑底小孔は6つである。覆土はロームと黒色土が層状またはブロック状に混交して埋まっている。等高線方向と斜面の方向は垂直のはずだが、その中間の角度に細長い。即ち長軸方向は、斜面に対して斜方向である。

小竪穴111 (第17図、写真15・16)

東尾根K区の南東急斜面の突端にあって、溝状に細長い落とし穴である。短軸断面では、ローム塊が南坑壁に多く貼り付く。長軸方向はほぼ等高線と平行である。坑底小孔は8つあるが、3つは再利用による打ち直しと考えられるので、5つを基本とする。東端の巨礫は人為的なものではない。

小竪穴121 (第18図、写真17)

西尾根H区の尾根頂部に在る。他の落とし穴に較べてかなり浅く、坑底小孔7つは不規則に見えるが、3つまたは4つを基本とし、再利用の結果7つとなったと考える。尾根方向よりやや北斜面に振った方向に長軸をもつ。

小竪穴123 (第18図、写真18)

落とし穴である。西尾根H区の尾根頂部よりやや北斜面にあり、小竪穴121と同一線上にある。上端は溝状の中間が膨らんだ珪藻のような形で、坑底は溝状の長方形である。坑底小孔は5つである。壁は垂直に近いが、中間の膨らんだ部分では下過半は垂直に近いが、上方は外側へ解放した形である。この部分を崩れと捉える調査担当者は少なくないであろうが、当初からこのような形状だったと考えている。

小竪穴172 (第19図、写真14・19)

西尾根F区の尾根頂部に在って、長軸が尾根方向にある落とし穴である。平面形は長円形で、坑底は長方形であり、上下とも長軸方向に直線的なラインをもつ。坑底は平坦であり、坑底幅は58cmと広い。坑底小孔は3つあった。壁は急な傾きで直線的に下がる。埋没は自然堆積である。畑地の造成で上部を削平され、ハード・ローム中で検出されたので、実際はもっと深かった。

小竪穴185 (第20・36図、写真20・21)

落とし穴である。西尾根F区の北斜面に在り、長軸は等高線の方向である。検出面の平面形は長円形で、坑底形は隅丸の長方形である。坑底幅は最大74cmと広い。最下層には坑底を間違うほど、ロームだけが堆積していた。坑底小孔は2基を基本として3基が検出された。壁は傾き、直線的に傾斜する。

小竪穴186 (第19図、写真22・23)

落とし穴である。西尾根F区の北急斜面に在り、長軸は斜面の方向にある。検出面の平面形は長円形で、坑底形は溝状に細長く、6基の坑底小孔が穿たれていた。坑底は両足をそろえて立てないほど狭い。長軸の両壁には、ローム塊が隙間無く貼り付いて、あたかも坑壁がもっと狭いようであった。

小竪穴187 (第21図、写真24)

落とし穴である。西尾根F区の北急斜面に在り、長軸は斜面の方向にある。小竪穴186と同じ獣徑を利用したものか。検出面の平面形は、長円形を更に溝状に長くした形状で、底部は溝状の長方形、坑底小孔は6つである。壁は直線的な急傾斜である。最上層を除き、崩落状の堆積の様相を示す。

小竪穴192 (第21図、写真25)

落とし穴で、西尾根F区の北斜面に在り、長軸は等高線または斜面方向に対し、斜方向にある。上端の形状は長円形だが、坑底は隅丸の長方形で、坑底小孔と認定したものは2つである。

小竪穴203 (第22図)

坑壁と坑底の区別が不明瞭で、底部に凹凸があって整わない浅い土坑である。

小竪穴209 (第22図、写真26)

西尾根F区の尾根平坦部にあり、長軸は尾根の方向にある。形状は、検出面で長円形、坑底で長方形である。壁は直線的に傾斜する。落とし穴であり、坑底小孔は3つである。

小竪穴223 (第23図、写真27)

西尾根E区の尾根頂部にある落とし穴で、長軸は尾根の方向にある。形状は、検出面で長円形、坑底は長方形を成す。壁は途中で屈曲するが、屈曲部までは急な傾斜で、屈曲部以下は垂直に近い。坑底小孔は4つあった。

小竪穴228 (第23図、写真28)

落とし穴である。西尾根E区の尾根頂部であり、尾根の方向に長軸がある。小竪穴223と同一線上にあり、6mの距離をおく。断面は漏斗状で、上部は外側に解放し、下部は垂直に近い。長円形状のものでは当遺跡最大級で、底部は溝状の長方形である。坑底小孔5基のうち、西から2番目には施設の先端部分の木質が僅かに残存していた。

小竪穴237 (第24図、写真29)

西尾根E区の尾根平坦部に在る落とし穴で、尾根の方向と垂直な方向に長軸をもつ。検出面の形状は長円形、底部の形状は隅丸の長方形であり、長軸辺に上下とも直線的な部分をもつ。底部と壁際はロームだけが溜まる。壁は直線的に傾斜する。坑底小孔は2つ。

小竪穴244 (第24図、写真30・31)

落とし穴である。西尾根E区の南斜面に移る尾根平坦部のへりに在り、等高線と同方向に長軸がある。下層はブロック状のローム、上層はIが堆積する。検出面の形状は長円形、底部では長方形である。南東端を攪乱で欠損する。坑底小孔は5つあるが間隔が不均一であり、両端と中央との3基とこれらを除く2基が各1セットで、打ち直しの結果と考える。

小竪穴307 (第25図、写真48・49)

西尾根E区の南西斜面に移る尾根平坦部のへりに在る円形集石炉である。399個の礫を使用し、よく被熱している。拳大～人頭大の安山岩を利用し、角礫主体で1割は円礫である。石を取り除いた形状はすり鉢状で、底部には花卉状の配石があった。

小竪穴312 (第25図、写真34・35)

西尾根E区の尾根平坦部に在る落とし穴である。検出面での形状は長円形、坑底では長方形となる。壁は直線的に傾斜する。2つの木杭を打ち直して、再利用した痕跡がある。

小竪穴325 (第26図、写真32・41)

西尾根D区の南西緩斜面に在り、長軸は尾根の方向と斜面の方向との中間の方向、つまり斜方向にある落とし穴である。円形に近い長円形プランで、壁は屈曲して下半で垂直に近くなり、底部は中央がややくびれた長方形となる。5基の坑底小孔が検出された。

小竪穴326 (第27図、写真33・41)

落とし穴である。西尾根D区の南西緩斜面に在り、長軸は等高線と同方向である。楕円形プランで、壁は屈曲して下半で垂直に近くなる。底部は中央がややくびれた長方形である。坑底木杭は2本を基本とすると考えられる。

小竪穴327 (第26図、写真41・50・51)

平面円形の配石炉で、上部に集石をもたず、坑下半の壁と底部に配石されている。底部には7つの石を組んだ花卉状の配石が観られ、よく被熱している。安山岩の角礫24個より成る。埋土はIに～100mm大の炭化物を15%、 ϕ ～10mmの焼土塊を1%以下含有する。D区南西緩斜面に在る。

小竪穴346 (第27図)

落とし穴である。上面細長い長円形、下面は溝状で、両足をそろえて立てないくらい細い。壁の屈曲部は、壁が屈曲するタイプの中でもかなり下方にある。E区北斜面の等高線方向にある。坑底小孔は4つある。

小竪穴350 (第28図)

E区尾根平坦部北端にあり、長円形で壁と底部の区別がはっきりしない緩やかな穴である。

小竪穴354 (第28図、写真42)

落とし穴で、D区尾根平坦部北端にあり、長軸は尾根方向より若干斜めに振る。上面楕円形で、底部は楕形となる。壁は途中で斜から直に屈曲する。坑底には小孔が2つみつかった。

小竪穴355 (第28図、写真36)

落とし穴で、D区北斜面、等高線と同方向にあり、壁は直線的に傾く。検出面における形状は長円形、底部は坑底幅のある長方形である。長軸は等高線の方向より僅かに振る。坑底小孔は2つを基本とすると考えられる。

小竪穴359 (第29図、写真43)

D区尾根平坦部の北端にある落とし穴で、検出面における形状は長円形、坑底部の形状は長方形である。壁は直線的に傾くが、坑底近くなって屈曲し、ほぼ垂直となる。坑底小孔は2つを基本とする。下半はローム・ブロックが厚く堆積していた。長軸は等高線と同方向である。

小竪穴389 (第29・38図、写真37・38・40・63・64)

C区北斜面の等高線方向にあり、検出面における形状は長円形、坑底は溝状の長方形である。壁は屈曲するタイプの落とし穴である。西から2番め・3番めの坑底小孔の先端部(木製品1・2)が残存していた。これは正しく“杭”の先端に外ならず、4面が取られている。僅かに加工痕が認められ、石器により加工されたとすれば驚愕に値し、縄文時代の所産ということに疑念を抱く。この先端部だけでは角材のようであるが、明確に四角い坑底小孔が観られないことから面取りは先端だけで、上部では丸太であったと考えられる。しかし、今後は坑底小孔の形状に十分注意する必要がある。載ち割りを行ったが掘り形は認められず、先端の形状より上から打ち込まれたものであることは決定的である。この場合に明らかなことは、木杭の上端が民族例にもあるように鋭利に尖らせてあるとすれば、坑底に杭として打ち込んだ後、その加工を行なわなければならなかったことになる。坑底施設については後述する。

小竪穴396 (第30図、写真52)

C区平坦部にある用途不明の不整長円形の土坑で、角礫4個が坑底より浮いて配される。炉に用いられたものではなく、礫は被熱していない。

小竪穴406 (第30図、写真44)

C区北斜面の等高線方向にあり、上面長円形、底部長方形であり、壁は屈曲するタイプの落とし穴である。杭底小孔は2つだけである。

小竪穴410 (第30図、写真53)

C区北緩斜面にある集石炉で、親指大～人頭大の礫233個からなり、よく被熱している。掘り形はすり鉢状でありあまり深くない。

小竪穴425 (第31図、写真39)

B区北緩斜面にある落とし穴で、長軸は等高線と垂直方向である。検出面における形状は長円形で、坑底は溝状である。壁は途中で斜からほぼ直に屈曲する。杭底小孔は5つある。

小竪穴426 (第32図)

B区北緩斜面にある。平面不整形で、断面壺状の土坑である。

小竪穴429 (第31図、写真41・45)

D区尾根平坦部にある落とし穴で、長軸は尾根の方向よりやや振る。検出面における形状は楕円形で、坑底は中くびれの長方形である。孔底小杭は1つを基本とし、5つがあった。南東壁下部に径20cm、坑底からの深さ30cm程の穴が斜掘されていた。これは通常の杭底小孔とは異なる。

小竪穴453 (第32図、写真47)

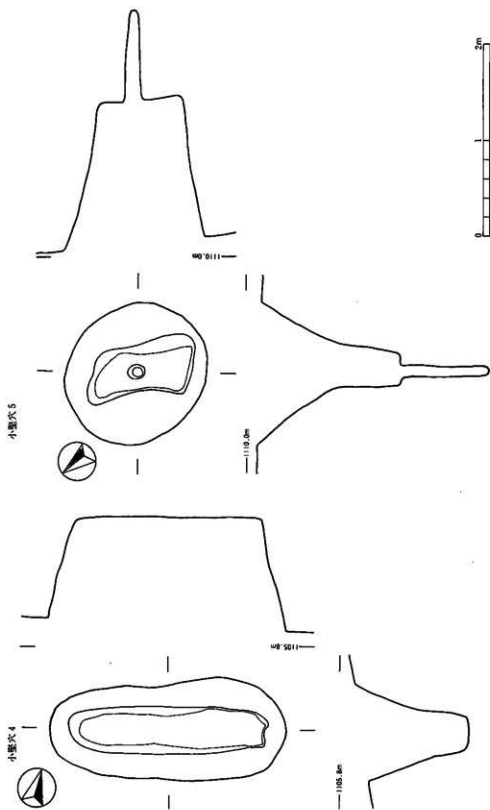
C区尾根平坦部にある。平面円形で、断面壺状の土坑である。

小竪穴459 (第32図、写真54)

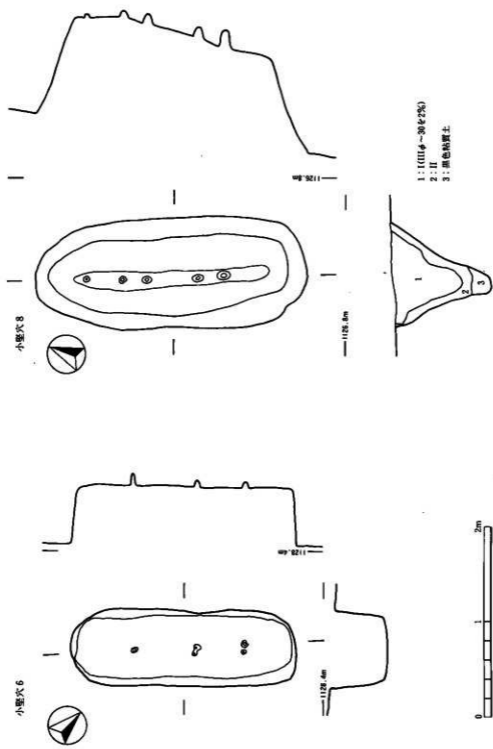
E区斜面の端部にある小規模な集石炉で、拳大～人頭大の14個の安山岩を花卉状に配し、よく被熱している。掘り込みは浅い。

小竪穴460 (第32図、写真55)

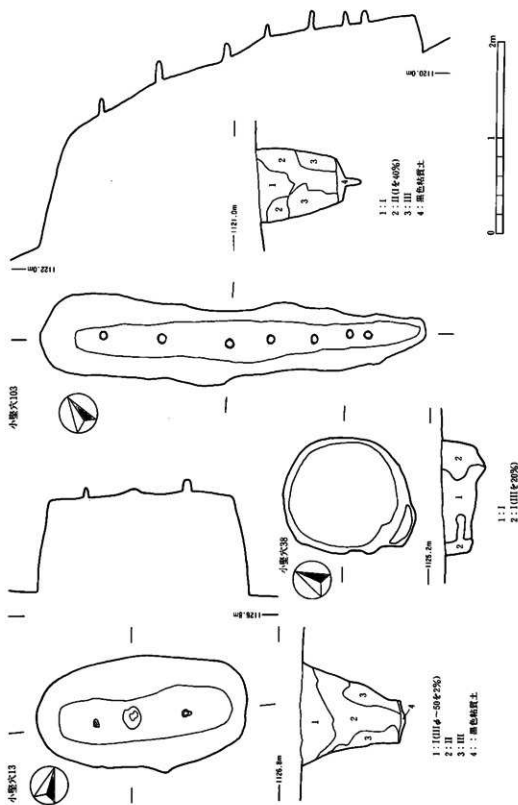
遺跡西北端B区の北緩斜面にある集石炉で、坑底に角礫を主体として花卉状に配礫し、その上に拳大の礫が数個乗る。礫長は3～15cmで、円礫8個と角礫15個より成り、よく被熱している。



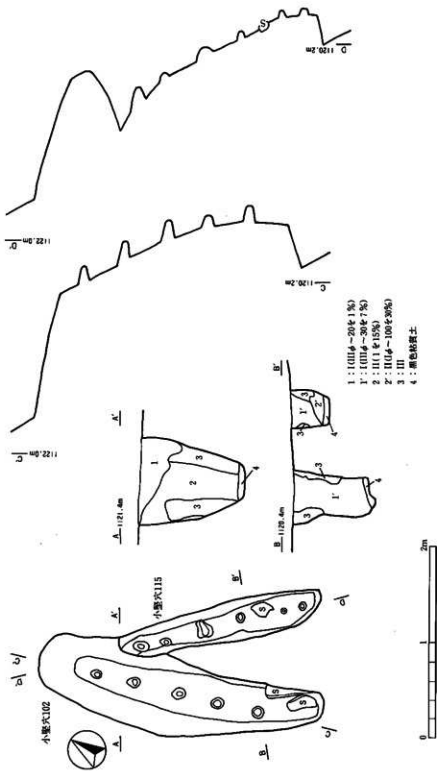
第13図 小墓穴 4・5 実測図 (1:40)



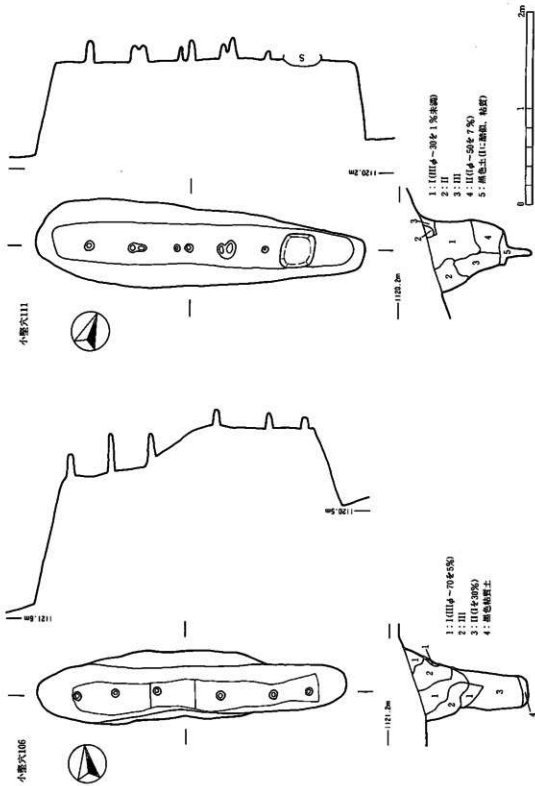
第14図 小塚穴6・8 平面図 (1:40)



第15圖 小壘穴13・38・103実測図 (1 : 40)

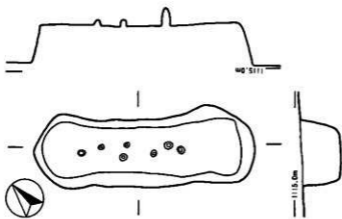


第16圖 小墓穴102・115平面圖 (1:40)

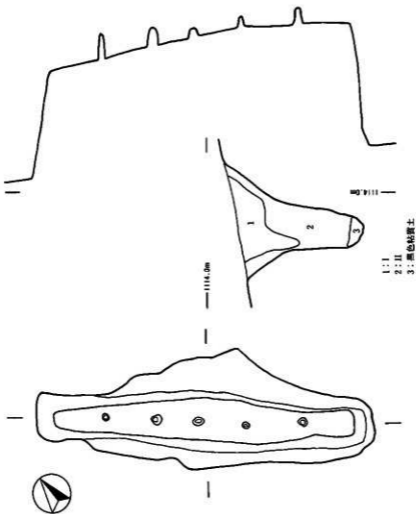


第17図 小塚穴106・111実測図 (1:40)

小墓穴121



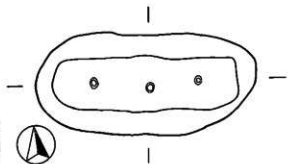
小墓穴123



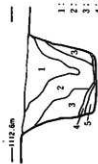
第18圖 小墓穴121・123平面圖 (1:40)



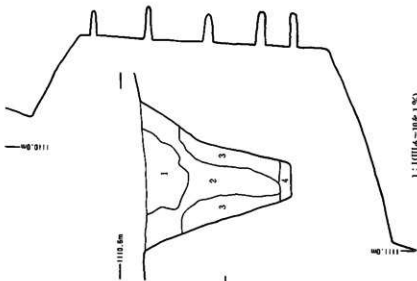
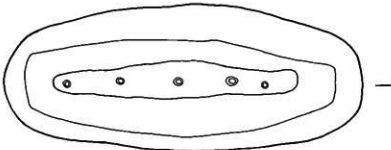
小墓穴172



- 1: I(IIIφ-10×2%)
- 2: II
- 3: III(IIIφ-100×3%)
- 4: 黒粘質土
- 5: III



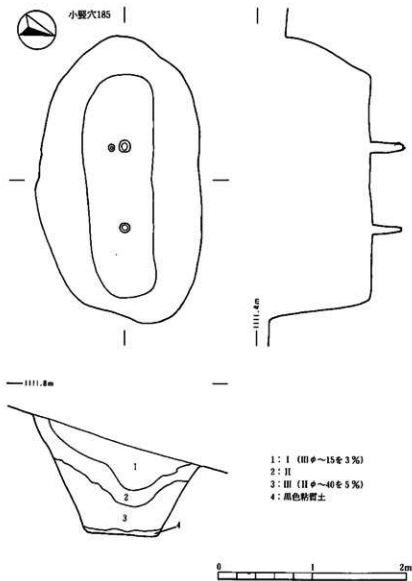
小墓穴186



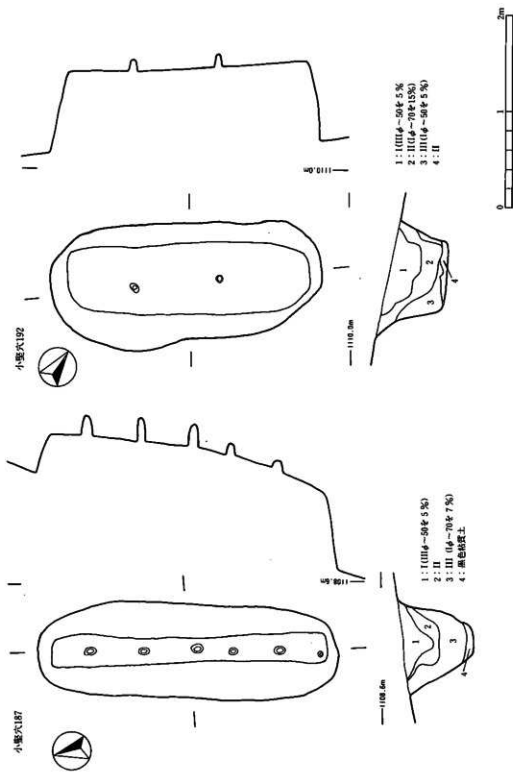
- 1: I(IIIφ-10×1%)
- 2: II(IIIφ-70×3%)
- 3: プロック状のIII
- 4: 黒粘土 (に黒炭、やや粘質)



第19図 小墓穴172・186実測図 (1:40)

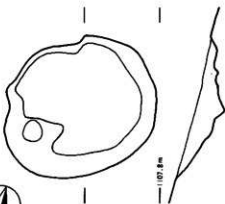


第20圖 小竪穴 185 (1:40)



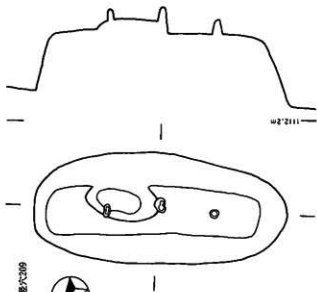
第21圖 小墓穴187・192実測図 (1:40)

小壘穴203



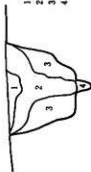
I (IIIφ-30±5%)

小壘穴209



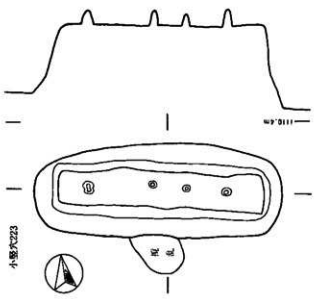
—112.2m

- 1 : I (IIIφ-30±2%)
- 2 : II (IIφ-30±5%)
- 3 : III (IIφ-20%)
- 4 : IIc (溝痕)



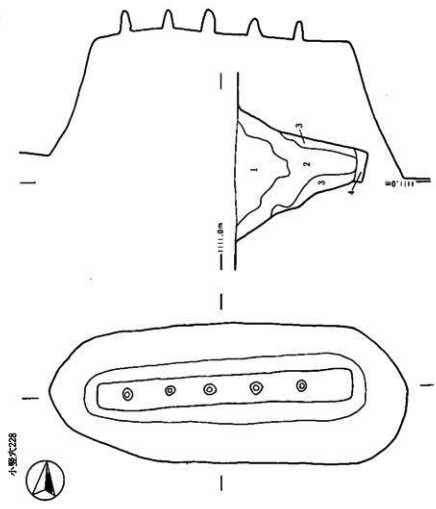
第22圖 小壘穴203・209実測図 (1:40)

小墓穴223



- 1 : III(φ-50±2%)
- 2 : III(φ-50±5%)
- 3 : III(φ-70±2%)
- 4 : 脚取 (粘附)

小墓穴228

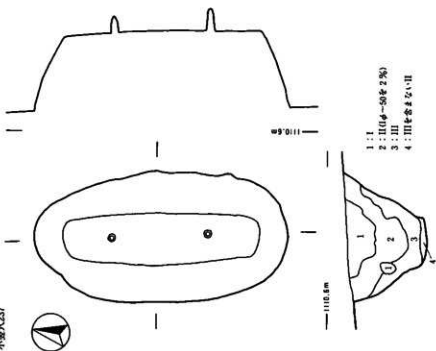


- 1 : III(φ-50±2%)
- 2 : III(φ-70±15%)
- 3 : プロック状のIII
- 4 : IIIを含むい-III(中+粘附)

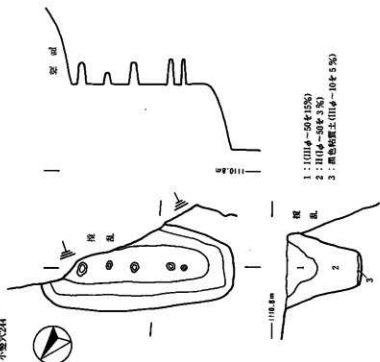


第23図 小墓穴223・228実測図 (1:40)

小墓穴237

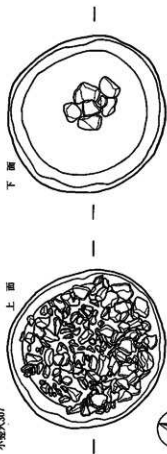


小墓穴244

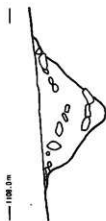
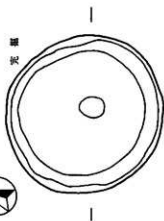


第24図 小墓穴237・244実測図 (1:40)

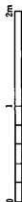
小塚穴307



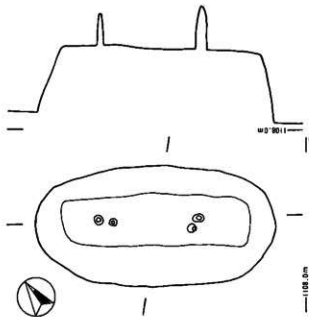
完掘



黒褐色土 (IIIφ-100を30%)



小塚穴312



- 1 : I(IIφ-70を10%, IIIφ-10を2%)
- 2 : II
- 3 : ブロック状のIII
- 4 : IIIを高まよい-II(中粘質)

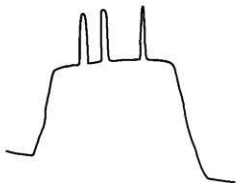
第25図 小塚穴307・312実測図 (1:40)



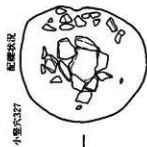
—1106.2m



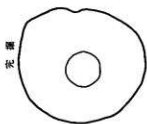
—1197.0m



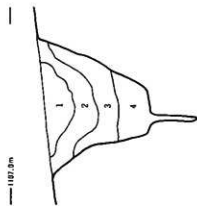
小壘穴327



穴 掘



—1197.9m



- 1 : I(田)4~70を10%, 田4~10を2%
- 2 : II(田)4~30を5%
- 3 : プロッタ状の田(田)4~70を1%
- 4 : 田を含まないII(やや結構)



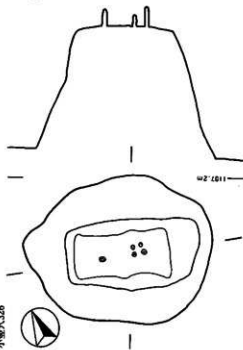
—1197.0m

- 1 : I(灰化物)100を15%
- 2 : 灰化物(焼土)4~5を1%未満

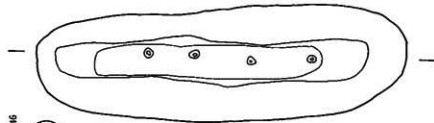


第26図 小壘穴323・325・327実測図 (1 : 40)

小塚式326



小塚式346



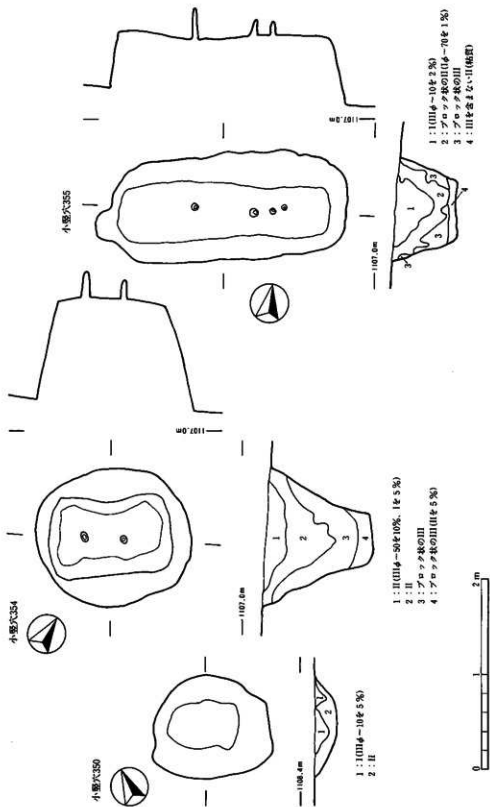
-44-

- 1 : I(山φ-70を2%)
 2 : II(山φ-30を1%)
 3 : プロック状の山(山φ-70を2%)

- 1 : I(山φ-50を5%)
 2 : II
 3 : プロック状の山(山φ-70を7%)
 4 : I(山φ-20を7%、粘質)

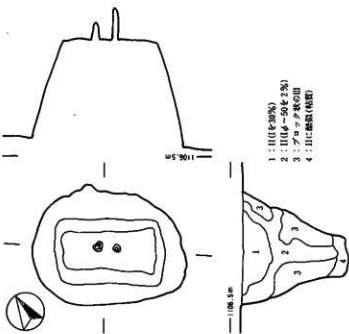


第27図 小塚式326・346要図 (1:40)

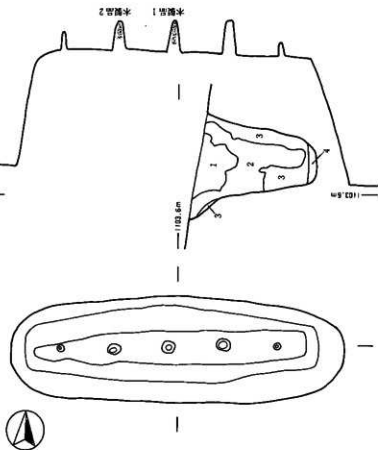


第28図 小塚穴350・354・355実測図(1:40)

小壘穴359



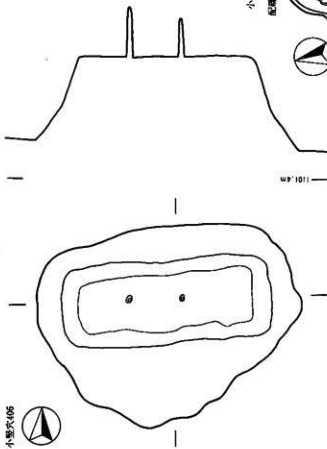
小壘穴389



第29図 小壘穴359・389実測図 (1 : 40)



小壑穴406

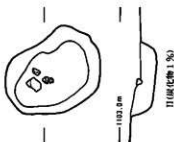


10.4m

- 1 : III ϕ -30(3%)
- 2 : II(III ϕ -50(3%))
- 3 : アロクサ群のIII
- 4 : II: 鹿瓦(極重)



小壑穴396



10.0m

目(傾化率1%)

小壑穴410

配座状況



10.4m

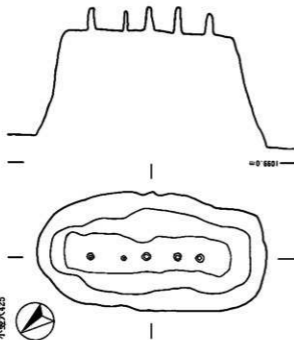
完蓋



2m

第30圖 小壑穴396・406・410実測図 (1:40)

小墓式425

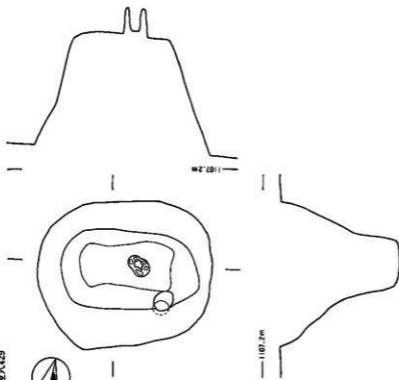


- 1 : I
- 2 : II
- 3 : アロツク状のIII
- 4 : IIIを帯まないII

—109.0 m

—109.0 m

小墓式429



—107.2 m

—107.2 m



第31図 小墓式425・429実測図 (1:40)

小墾穴426



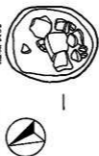
—1099.0 m
 (III号-70号 5%)

小墾穴453



—1011.4 m
 (III号-30号 3%)

小墾穴459



—1105.0 m
 (III号 7%)

小墾穴460



—1098.0 m
 II

空堀



第32圖 小墾穴426・453・459・460実測圖 (1:40)

小堅穴一覧表

小堅穴	位 置	形	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	備 考
1	DV-39	円形	50	42	23	
2	DW-40	隅丸長方形	102	74	45	
3	DW-39-40	隅丸長方形	53	44	51	
4	EF・EG-41・42	長円形	249	105	120	落とし穴
5	EH・EI-43・44	円形	154	138	162	落とし穴
6	LV・LW-99-100	隅丸長方形	235	79	64	落とし穴
8	KX・KY-95~97	長円形	284	115	109	落とし穴
9	KY-92-93	不整形	109	70	22	
10	KXKY-90	円形	77	58	26	
12	KT-95-96	不整形	128	85	37	
13	KU・KV-91	長円形	222	121	110	落とし穴
14	KW-89	円形	53	42	25	
15	KR・KS-87	長円形	170	98	50	
16	KN-94	長円形	83	52	17	
19	KP-81	不整形	107	71	41	
20	KN・KO-80-81	長円形	32	22	11	
22	KI-88-89	円形	58	45	11	
23	KJ-88	円形	48	35	14	
24	KJ-86-87	長円形	84	62	28	
25	KG・KH-87-88	不整形	174	65	29	
27	KD・KE-89	長円形	74	48	19	
28	KD・KE-88	長円形	86	54	21	
29	KC・KD-89	隅丸長方形	110	86	23	
30	KC-89	長円形	83	60	8	
31	KC・KD-87	長円形	130	72	24	
32	KC-87	不整形	88	73	22	
33	KB・KC-86-87	円形	71	64	11	
34	KC-86	不整形	72	41	14	
38	KE・KF-84	円形	131	120	39	
41	KA・KB-87	長円形	44	35	30	
43	KB-87	不整形	40	26	15	
44	KB・KC-85-86	不整形	140	107	26	
45	KB-85	長円形	111	58	15	
46	KC-85	不整形	180	74	27	
47	KC-84-85	不整形	91	73	27	
48	KA-86	長円形	45	32	30	
49	KA・KB-85	不整形	40	38	14	
50	KA・KB-84-85	円形	45	40	13	
52	JY-87	円形	39	31	26	
53	JX・JY-86	不整形	115	87	21	
54	JY・KA-85	不整形	107	74	26	
55	JY-84-85	不整形	70	42	14	
57	KB-83	不整形	(77)	66	20	小堅穴58に切られる
58	KB・KC-83	長円形	(107)	79	35	小堅穴57を切り、小堅穴59に切られる
59	KB・KC-83	不整形	100	79	24	小堅穴58を切る
60	KB-83	不整形	56	35	23	
61	JX-86-87	長円形	84	53	15	
62	JV-87-88	長円形	95	59	23	
63	JV-87	不整形	98	55	25	
64	JV・JW-87	不整形	65	42	14	
65	JX-85	長円形	55	38	22	
66	JW・JX-85	不整形	45	45	23	

小堅穴	位 置	形	長 軸 cm	短 軸 cm	深 さ cm	備 考
67	JX-84	円形	34	27	12	
68	JW-JX-84	長円形	48	37	16	
69	JX-JY-83-84	円形	48	38	14	
70	JY-83	長円形	38	30	24	
71	JX-82-83	長円形	60	38	15	
72	JY-82	円形	59	50	33	
73	JX-82	長円形	74	42	15	
74	JU-JV-89-90	円形	45	38	19	
75	JU-JV-89	不整形	65	62	18	
76	JU-88-89	隅丸長方形	112	82	19	
77	JS-JT-88-89	長円形	216	110	34	
78	JT-JU-87-88	円形	88	70	29	
79	JU-JV-86-87	円形	130	106	22	
80	JV-JW-85-86	円形	48	44	18	
81	JV-85	長円形	55	38	17	
82	JU-JV-85	不整形	78	60	13	
83	JU-84-85	長円形	71	58	61	
84	JW-83	不整形	38	34	10	
85	JV-JW-83	円形	53	47	31	
86	JV-83	円形	48	37	23	
87	JU-83	円形	66	56	28	
88	JV-82	円形	37	32	28	
89	JW-82	長円形	29	27	33	
90	JW-82	長円形	47	33	14	
93	JV-JW-81-82	長円形	(140)	120	24	小堅穴94に切られる
94	JW-81	円形	68	66	35	小堅穴93を切る
95	JV-82	不整形	46	34	16	
96	JV-82	円形	44	43	16	
97	KW-KX-88	円形	156	125	47	
98	KP-79	長円形	57	48	53	
99	KO-KP-78-79	長円形	112	60	65	
100	KO-KP-78	不整形	120	116	72	
101	K-78	円形	98	88	64	
102	KM-KN-76-77	長円形	303	(85)	130	落とし穴、小堅穴115に切られる
103	KL-KN-75-77	長円形	406	85	119	落とし穴
104	KL-75	長円形	90	49	43	
106	KI-KK-74	長円形	325	123	136	落とし穴
107	KK-73	方形	53	31	21	
108		不整形	72	24	27	
109		不整形	54	49	27	
110	KG-KH-71-72	不整形	53	35	23	
111	KG-KI-71	長円形	345	89	104	落とし穴、小堅穴112を切る
112	KH-71	長円形	(40)	25	22	小堅穴111に切られる
115	KN-KO-76-77	長円形	272	40	48	落とし穴、小堅穴102を切る
116	KG-70	方形	163	120	52	
119	JY-72	長円形	54	33	20	
121	HK-HL-83-84	隅丸長方形	232	78	47	落とし穴
122	HM-90	不整形	65	55	27	
123	HD-HE-86-87	隅丸長方形	353	116	143	落とし穴
124	HC-HE-89-90	不整形	250	153	42	
125	HC-91	不整形	101	68	47	
126	HB-HC-90	不整形	175	108	34	

小壁穴	位置	形	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	備考
127	HA・HB-88・89	不整形	149	90	30	
128	HB-89・90	円形	61	54	20	
129	HB-88	不整形	133	43	38	
130	HC-86	不整形	120	76	54	
131	GW-84・85	長円形	150	100	38	
132	GW-89	不整形	62	52	28	
133	GW-90	長円形	86	50	26	
134	GV・GW-90	長円形	61	48	16	
135	GU・GV-88・89	長円形	161	96	39	
136	GS・GT-88・89	不整形	193	181	63	
137	GQ・GR-90・91	方形	92	80	37	
138	GQ-89	円形	82	72	40	
139	GQ・GR-88・89	隅丸長方形	77	60	34	
140	GR-85・86	不整形	77	54	30	
142	GP・GQ-81	隅丸長方形	114	82	33	
143	GM-82・83	不整形	148	59	25	
144	GL-80	不整形	76	35	12	
145	GJ-80	隅丸長方形	53	40	11	
146	GN-85	隅丸長方形	62	45	24	
147	GP-87	不整形	49	43	22	
148	GM・GN-87	不整形	91	89	26	
149	GL・M-88	長円形	61	36	19	
150	GL・GM-90	円形	195	159	54	
151	GL・GM-90・91	不整形	80	77	39	
152	GL-91・92	長円形	45	35	25	
153	GL-92	長円形	65	46	25	
154	GO-90	不整形	77	75	32	
155	GN-92	不整形	77	52	23	
156	GN・GO-93	円形	55	55	22	
157	GG-89	不整形	109	86	41	
158	GC-89	長円形	100	64	44	
159	GA-88	長円形	93	44	16	
160	GB・GC-86	長円形	77	46	24	
161	GA-86	円形	47	41	13	
162	GA-85	長円形	102	58	30	
163	GE-81	円形	69	66	19	
164	GC・GD-80	長円形	60	42	10	
165	GC-80	不整形	71	41	12	
166	FV-87	円形	81	59	92	
167	FU・FV-87	不整形	58	50	28	
168	FT-87	長円形	53	41	22	
169	FQ-86	円形	38	38	20	
170	FN・FO-81	円形	65	59	31	
172	FS・FT-80・81	長円形	232	150	86	落とし穴
173	FS-78・79	円形	48	45	20	
174	FR・FS-79	長円形	67	(45)	34	撥乱を受ける
176	FQ-79	長円形	71	49	22	
177	FQ-79	円形	47	46	10	
179	FM-77	円形	62	60	16	
181	FK-77	長円形	49	35	9	
182	FJ-77	長円形	70	52	74	
183	FI-76	円形	68	(46)	7	撥乱を受ける
184	FI-76・77	長円形	80	62	21	
185	FJ・FL-81・82	長円形	292	174	133	落とし穴

小墜穴	位 置	形	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	備 考
186	FK・FL-82~84	長円形	376	152	160	落とし穴
187	FK・FL-85~87	長円形	324	84	80	落とし穴
188	FI-82	円形	70	58	38	
189	FI・FJ-83	円形	50	45	31	
190	FJ-83	長円形	100	55	38	
191	FF-82	円形	82	74	28	
192	FE・FF-82~84	長円形	285	123	143	落とし穴
193	FF・G-83・84	円形	60	53	38	
194	FG-83	長円形	78	67	36	
195	FG-84	長円形	80	47	33	
196	FH-84	長円形	66	53	26	
197	FF-86・87	長円形	60	35	28	
198	FA・FB-81	長円形	78	57	32	
199	EX・EY-82	隅丸方形	62	58	33	
200	ET-81・82	長円形	72	41	32	
201	ES-80	円形	98	82	38	
202	ES-83	円形	51	48	29	
203	ES・ET-83・84	円形	170	145	61	
204	EG-75・76	隅丸長方形	86	60	15	
205	FH-74	長円形	45	35	13	
206	FH・FI-72・73	長円形	120	79	25	
207	FJ-69・70	長円形	52	37	39	
209	FL・FM-67~69	長円形	265	117	92	落とし穴
210	FG-71	方形	68	43	46	
211	FE・FF-72	円形	40	39	16	
212	FE-70	不整形	52	32	11	
213	FF-70	長円形	85	72	28	
214	FB・FC-70・71	隅丸長方形	101	85	19	
215	FA・FB-71・72	長円形	171	45	45	
216	FA-72	長円形	43	33	11	
217	EY-72	方形	70	43	9	
218	EY-73	円形	56	46	11	
219	FB-75・76	長円形	103	75	16	
222	EW・EX-74・75	長円形	139	100	39	
223	EQ・ER-73	長円形	260	(96)	91	落とし穴、攪乱を受ける
224	ET-73	不整形	53	48	45	
225	ES-73	隅丸方形	154	72	36	
226	ET-75	長円形	96	50	18	
227	ES・ET-75	不整形	63	27	11	
228	EU・EV-73・74	長円形	377	143	157	落とし穴、木質僅かに残存
229	ET-72	不整形	105	80	26	
230	FU-71	長円形	87	54	19	
231	EV-70・71	円形	49	44	13	
232	EU-69	円形	59	51	16	
233	ES・ET-70	長円形	77	48	22	
234	ET・EU-67・68	長円形	106	73	31	
235	ET・EU-67	円形	83	82	26	
236	EU-66	長円形	58	45	20	
237	ET・EU-65・66	長円形	266	137	87	落とし穴
238	EV・EW-66	隅丸長方形	97	(90)	19	小墜穴239に切られる
239	EV・EW-66	円形	50	(39)	14	小墜穴238を切り、小墜穴240に切られる
240	EV・EW-66	円形	47	41	22	小墜穴239を切る

小堅穴	位 置	形	長軸 cm	短軸 cm	深 さ cm	備 考
241	EW-64-65	円形	101	80	25	
242	EW-64-65	円形	48	40	10	
243	EX-EY-67	長円形	68	40	28	
244	FD-FE-60-61	隅丸長方形	(200)	(82)	78	落とし穴、撥乱を受け る
245	FE-FF-62-63	不整形	141	97	55	
246	FE-67	円形	34	32	22	
247	EQ-ER-54	長円形	92	53	14	
248	EP-EQ-52-53	長円形	135	75	24	
250	EP-EQ-55	円形	67	58	10	
251	EP-EQ-55	不整形	60	52	14	
254	ER-55-56	隅丸長方形	80	40	17	
255	ER-ES-55-56	長円形	53	38	14	
256	EQ-58	長円形	92	68	17	
257	ER-59	長円形	58	52	10	
259	ES-ET-60	不整形	74	60	15	
260	ES-60-61	長円形	70	43	25	
261	ES-60	長円形	48	36	12	
262	EQ-60	長円形	82	53	18	
263	EM-58-59	不整形	42	39	13	
264	EO-58	不整形	74	35	16	
266	EO-59	長円形	68	36	15	
267	EN-60	長円形	68	36	15	
268	EM-61	長円形	55	41	35	
269	EM-61	長円形	47	33	17	
270	EP-61-62	長円形	76	48	20	
271	ET-61	円形	52	40	20	
272	ES-ET-61	隅丸長方形	57	40	18	
273	ER-63	不整形	170	72	26	
274	ER-62-63	不整形	120	49	17	
275	ES-64	長円形	107	62	42	
276	EQ-64	長円形	94	42	18	
277	EP-63-64	不整形	78	42	12	
278	EP-64	長円形	73	50	21	
279	EL-66	長円形	70	50	14	
280	EL-66	長円形	70	50	14	
281	EG-EH-48-49	方形	209	159	49	
282	EN-68	円形	55	45	16	
283	EN-EO-68	長円形	82	63	17	
284	ER-67	不整形	138	93	16	
285	EP-EQ-69	円形	93	85	25	
286	EP-68	円形	53	48	12	
287	EP-69	隅丸長方形	94	72	28	
288	EO-EP-69	長円形	85	42	13	
289	EQ-70	長円形	76	59	18	
290	EQ-70	円形	65	49	28	
291	EO-70	長円形	82	39	14	
292	EN-EO-71	長円形	70	50	17	
293	EG-48-49	方形	130	95	19	
294	EM-52-53	長円形	82	60	22	
295	EJ-EK-51	長円形	80	49	16	
296	EI-EJ-52-53	不整形	178	87	18	
297	EJ-53	隅丸長方形	120	120	32	
298	EF-EG-54	不整形	245	105	56	

小室穴	位置	形	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	備考
299	EN-56	円形	70	60	16	
300	EM-56	円形	58	52	20	
301	EL・EM-56	長円形	117	58	22	
302	EL・EM-56・57	長円形	114	67	19	
303	EM-57	長円形	88	62	24	
304	EM-57	長円形	77	48	14	
305	EL-58・59	不整形	200	100	35	
306	EI-57	隅丸長方形	118	103	36	
307	EG-56・57	円形	208	204	79	集石炉
309	EF・EG-61・62	円形	105	105	28	
310	ED-63	円形	53	48	37	
311	EE-63・64	長円形	152	119	29	
312	ED・EE-65	長円形	315	157	82	落とし穴
313	EH-67	円形	80	78	15	
314	EG-68	円形	55	53	14	
315	ED-68	長円形	77	48	18	
316	EB・EC-67・68	長円形	164	91	18	
317	ED-69	長円形	107	67	17	
318	EC-69	円形	51	50	25	
319	EA・EB-68	不整形	57	51	14	
320	EA-68	不整形	66	52	17	
321	EB-64	隅丸長方形	72	53	25	
322	DY-64	長円形	118	90	19	
323	DX-62	円形	140	145	84	
324	DV・DW-65	長円形	81	55	12	
325	DT・DU-66・67	長円形	226	183	124	落とし穴
326	DU・DV-67・68	長円形	192	246	144	落とし穴
327	DT-68・69	円形	169	148	68	配石炉
328	DT-68	不整形	90	50	27	
329	DT・DU-70・71	不整形	90	45	33	
330	EL・DM-79	不整形	80	55	18	
331	EL-76	円形	78	67	23	
332	EL-77	長円形	80	50	11	
334	EK-77	長円形	60	34	14	
335	EL-79	不整形	101	73	44	
336	EJ・EK-77・78	不整形	73	60	31	
337	EJ-78	長円形	77	47	19	
338	EJ-77	円形	45	42	17	
339	EI・EJ-76・77	不整形	110	61	20	
340	EI・EJ-76	長円形	94	58	34	
341	EI-77	円形	54	50	13	
342	EH-77	長円形	73	40	26	
343	EH-77	長円形	78	50	24	
344	EG-76	隅丸長方形	52	41	20	
345	EF・EG-76	円形	57	42	16	
346	EE・EG-78・79	長円形	474	140	154	落とし穴
347	EE-79	不整形	100	70	23	
348	EI-80	長円形	153	85	37	
349	EH-79	円形	134	113	39	
350	ED-74・75	不整形	153	135	35	
351	DV-79	円形	47	45	27	
352	DW-83	長円形	105	80	31	
353	DV-82	長円形	103	67	25	
354	DQ-76	円形	197	180	120	落とし穴

小堅穴	位 置	形	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	備 考
355	DR・DS-78	長円形	327	140	78	落とし穴
356	DQ-79	長円形	80	68	25	
357	DP-82	円形	75	75	34	
358	DN・DO-72	不整形	98	59	18	
359	DN・O-75	長円形	200	174	122	落とし穴
360	DM-78	長円形	74	57	14	
361	DN-79	円形	67	57	8	
362	DN-82	円形	54	50	19	
363	DM・DN-81	円形	62	58	23	
364	DM-81・82	隅丸長方形	62	39	16	
365	DL-82	長円形	72	50	22	
366	DJ・DK-81	円形	177	145	46	
367	DJ・DH-79・80	長円形	110	72	26	
368	DF・DG-82	円形	162	124	26	
369	DF-83・84	隅丸長方形	98	78	33	
370	DF-84	不整形	75	54	49	
371	DD-78	不整形	109	70	29	
372	DC・DD-74・75	隅丸長方形	153	81	10	
373	DB-75	不整形	68	47	11	
374	DB-75	円形	75	60	19	
375	DA-75	長円形	112	62	14	
376	CY-74・75	円形	62	52	12	
377	CY・DA-76・77	長円形	95	55	20	
378	DA-77	長円形	95	70	15	
379	CY-77	不整形	130	52	15	
380	CX-77	不整形	125	69	26	
381	CX-76	長円形	97	60	23	
382	CV・CW-78	長円形	75	52	18	
383	CU-78	長円形	87	68	18	
384	CV-79	円形	62	60	16	
385	EV~EX-83~85	隅丸長方形	392	263	72	
386	DA-82-83	長円形	110	85	15	
388	CU・CV-83	不整形	104	70	20	
389	CR~CT 五81	隅丸長方形	439	136	147	落とし穴、木質残存
390	CT-82	円形	62	58	20	
391	CS-84	円形	65	59	23	
392	CT-84	長円形	164	84	25	
393	CR・CS-78	長円形	137	66	27	
394	OQ・CR-78-79	隅丸方形	82	78	22	
396	CK・CL-80-81	隅丸方形	122	112	31	
397	CI・CJ-77-78	長円形	231	82	35	
398	CJ-85	長円形	100	91	36	
399	CL-87	円形	65	60	18	
400	CK・CL-87-88	長円形	80	54	32	
401	CJ-89-90	長円形	165	113	37	
402	CD-83-84	隅丸長方形	92	75	26	
403	CD-83-84	隅丸長方形	92	75	26	
405	CF-87	不整形	128	105	17	
406	CG・CH-85-86	隅丸長方形	392	264	110	落とし穴
407	CB-84	隅丸方形	65	63	39	
408	CA・CB-83	不整形	90	62	15	
409	CB-81	不整形	78	78	20	
410	CC-82	隅丸長方形	190	172	51	築石炉
411	CC・CD-78	不整形	109	70	31	

小鑿穴	位 置	形	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	備 考
412	CC-78	不整形	106	104	21	
413	BY-81	隅丸長方形	83	64	27	
414	BX-81	長円形	87	65	30	
415	BW・BX-82	円形	78	70	24	
416	B-84	長円形	120	89	18	
417	BV・BW-80	長円形	88	65	13	
418	BU・BV-81	隅丸長方形	110	68	29	
419	BT・BU-82	長円形	84	70	25	
420	BR~BT-81	不整形	285	57	29	
421	BQ・BR-81・82	不整形	77	75	32	
422	BS-85・86	長円形	105	80	26	
423	BR・BS-86・87	不整形	80	55	28	
424	BQ-87・88	不整形	134	81	33	
425	BP・BQ-87・88	隅丸長方形	302	151	125	落とし穴
426	BN・BO-85	不整形	119	118	51	
427	BM-86	円形	55	49	29	
428	BG-88・89	隅丸長方形	119	92	26	
429	DT・DU-70・71	長円形	229	92	129	落とし穴
431	DM-68	円形	58	57	12	
432	DL-69	隅丸長方形	63	50	13	
433	DL・DM-66	円形	85	58	19	
434	DL・DJ-67	不整形	109	85	17	
435	DH-70	長円形	103	73	20	
436	DG-70・71	不整形	113	100	34	
437	DG-73	長円形	117	74	22	
438	DH-73	長円形	94	79	16	
439	DI-72・73	不整形	92	90	32	
440	DC・DD-71	長円形	68	50	41	
441	DD-72	長円形	78	63	21	
442	DA-68	隅丸長方形	83	62	25	
443	DA-69	長円形	78	50	14	
444	CY-69	長円形	70	35	18	
445	CX-70	長円形	99	73	24	
446	CW-69	隅丸方形	75	67	20	
447	CV・CW-69	長円形	75	53	27	
448	CU・CV-66	隅丸長方形	52	42	18	
449	CV-65	長円形	54	44	19	
450	CW-66	隅丸長方形	58	44	16	
451	CX-66	長円形	77	50	15	
452	CU-67・68	長円形	59	44	24	
453	CT-69	円形	90	85	23	
454	CO・CP-69	長円形	66	49	17	
455	CP・CQ-69・70	不整形	75	41	14	
456	CP・CQ-68・69	不整形	65	44	15	
457	CP-68	長円形	94	50	22	
458	CL-77	長円形	62	56	26	
459	EB-84・85	円形	96	76	42	配石炉
460	BI-89・90	不整形	60	59	17	築石炉

2 倒木痕を利用した遺構

以下に倒木痕を利用した遺構を図化し、説明を加える。倒木痕は従来、ロームマウンドと呼称されてきたものである。“ロームマウンド”という呼称は、倒木の根によってロームが上方へ持ち上げられたことは表すが、それによって出来たくぼみに腐植土が流没した状況を表していないので、あまり適確な呼称とは思えず、本稿では“倒木痕”とした。

集石 1 (第33図、写真56・57)

EO-78グリッドにある。北緩斜面のEM~EO-77~80グリッドにある倒木痕の腐植土上に設けられた集石で、親指大前後以下の小礫ばかり254個を集めてあり、径44cm以内に収まっていた。石の重なりには厚みがあるが、断面観察で掘り込みをもつとは判断出来なかった。倒木痕の埋没終末段階で配されたものと思われるが、どのような目的・必要性をもって成されたものかは分からない。

焼土跡 1 (第33図、写真58)

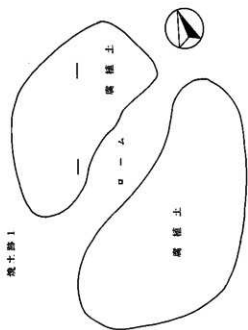
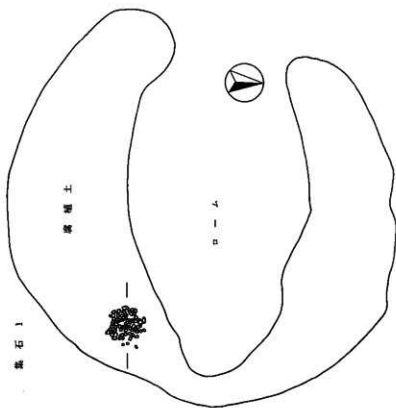
CF-85・86グリッドにある。北緩斜面のCF・CG-85~87グリッドに跨がる倒木痕の上にあり、中央のローム・マウンドの両側の腐植土上に火を焚いた跡がひとつずつある。北西のものは78×58×18cmの範囲に焼土の集積があった。南東のものは34×15cmの範囲に焼土が広がっていた。北西のものだけ断面観察を行った。両者に時間差があるかもしれないが、同一の倒木痕上にあるので、ひとつの遺構として扱った。埋没過程のくぼみを利用して火を焚いたものであり、風を避けるのに好都合だったと思われる。遺物は無い。落とし穴である小竪穴406と重複関係にあるが、新旧を判断することはできなかった。このため、時期を判定する情報は何もない。

焼土跡 2 (第34図)

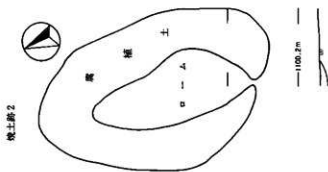
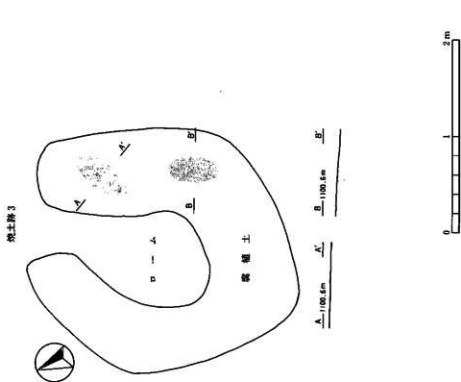
CD-88グリッドにある。北緩斜面のCC・CD-88・89グリッドに跨がる倒木痕の腐植土の南端に、42×13cm×12cmの火を焚いた跡があるのが本址である。焼土は微量だが、埋没過程のくぼみを利用したと考えられる。

焼土跡 3 (第34図)

CB・CC-85・86グリッドにある。北緩斜面のCB・CC-84~86グリッドに跨がる倒木痕の北側の腐植土上に火を焚いた跡が2カ所ある。西のものは66×30×9cm、東のものは57×30×6cmの範囲で焼土が広がる。両者に時間差があると思われるが、同一倒木痕上にあるのでひとつの遺構として扱った。風の影響を受けにくいくぼみとして、倒木痕の埋没過程を利用したと考えられる。



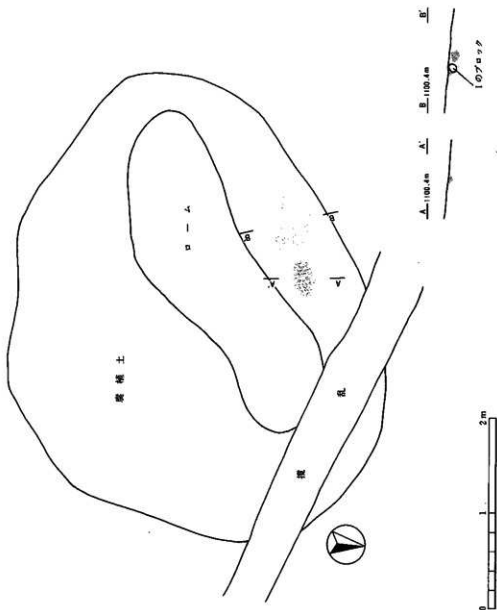
第33圖 集石 1・埴土跡 1 実測図 (1:40)



第34圖 燒土跡 2・3 実測図 (1:40)

焼土跡 4 (第35図、写真59)

CV-83・84グリッドにある。北緩斜面のCU~CX-82~84グリッドに跨る倒木痕の埋設過程を利用している。火を焚いた跡は2カ所あり、何れも北側の腐植土上である。西のものは、 $57 \times 41 \times -14$ cm、東のものは $40 \times 26 \times -6$ cmの範囲に焼土が広がる。両者に時間差があると思われるが、同一倒木痕上にあるのでひとつの遺構として扱った。

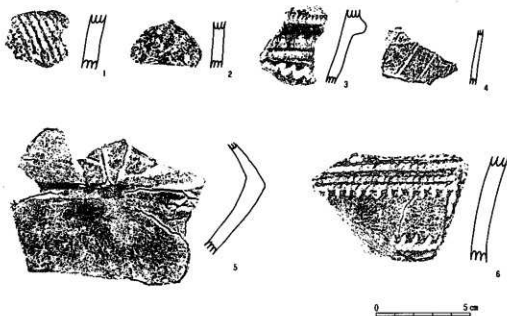


第35図 焼土跡4 実測図 (1:40)

3 遺 物

調査の概要でも触れたとおり集落址ではない遺跡の性格上、遺物は極めて少なくほとんど遺構外のものである。遺物には土器片・石器・木製品がある。図版に掲載したものについて簡単に説明を加える。

先ず土器片は第36図(1~6)を拓本で掲載したが、これらの他に20片以上があるものの、みな摩耗が著しく文様が確認できない細片ばかりである。(1)は東尾根北斜面の第16グリッドで包含層(II層)中より見つかったもの、(2)は同じく東尾根の尾根平坦部K区付近の検出面より見つかったもので、何れも縄文が施文されているが摩耗している。中期中葉の土器片として(3)と(6)があり、押し引き・連続刺突による施文、波状の沈線文がみられる。(3)は東尾根検出面、(6)は小壜穴185の最上層で見つかった。(4)は後期初頭の土器片で磨り消し縄文がみられる。表面黒色で薄手である。西尾根の検出面で見つっている。(5)は小壜穴33から出土し、無文土器であるが内面に赤色顔料が付着していた。内外面ともよく磨かれているが、焼成が悪く脆弱である。遺構出土のものは(5・6)であるが、(5)は覆土とともに流没したものの、(6)は遺構への帰属性が高いものと捉えている。



第36図 土器片拓本(1:2)



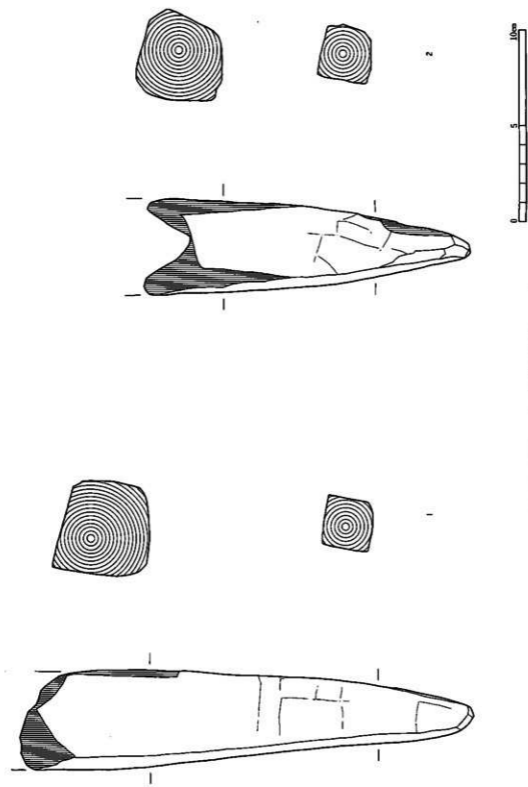
第37图 石器尖刃图 (1:1.5, 1:3)

石器は第37図(1~14)を掲載し、図版番号(1~14)と出土地点番号1~14(第5・6・8~12図)が対応するようにしてある。

縄文時代では石鏃・凹石・石皿・打製石斧(写真60・61)がある。石鏃は全て黒曜石製で(1)は東尾根KW-88グリッド、(2)は西尾根HC~HJ-83~85付近、(3)は東尾根KN~KS-82~87付近、(4)は西尾根CH-80グリッド、(5)はBQ-83グリッドの各検出面で見つかった。(1・2・5)は早期によく見られるタイプで、早期の土器片は見つからなかったが落とし穴の形状にも早期のものがあり、当遺跡が狩猟の場として縄文時代早期に機能していたことは間違いない。(6)は東尾根GY-92グリッド、(7)は西尾根GQ-80グリッドの検出面で見つっている。(6)は片面、(7)は両面に浅い凹みをもつ。何れも安山岩質で風化が進み、表面が自然剝離している。(8)は安山岩質の石皿片でKG~KN-94~97グリッド付近の検出面で見つかった。打製石斧は泥岩製の(9)が東尾根の尾根平坦部検出面(出土位置不詳)、粘板岩製の(10)がEW-57グリッドのI層中より見つかった。何れも刃部を欠損し、表面の摩耗が著しい。

旧石器時代のものと思われるものには(11~14、写真62)がある。石核(11)とスクレーパー(14)は、95年度調査区の排土中から見つかったため、グリッドではEJ~ET-43~49付近と思われるが、正確な出土地点は分からない。使用痕のある剝片(12・13)は、(12)がFN-77グリッド、(13)はCT-71グリッドのIII層上面で見つかった。これらは何れも麦草峠産の黒曜石である。

木製品は、落とし穴である小竪穴228と小竪穴389の坑底小孔内に残存していたもので、落とし穴の仕掛けを成していた木杭の先端部分である。小竪穴228の西から2番目の坑底小孔のものは木片に過ぎないが、小竪穴389の西から2番めと3番めのもの(第38図1・2、写真63・64)は原形を保っている。縦線部のスクリーントーンは欠損部、同心円のスクリーントーンは年輪をあらわす。年輪は模式的であるが、その中心の位置は精確にあらわしてある。2つとも杭として先端を鋭利に調整したもので、加工痕が認められ、角材のごとき面取りが成されている。縄文時代のものであるとするとあまりにも精巧な技術であり、驚愕に値する。現時点では保存処理・C14年代測定を実施していない。木製品についてはまとめの項でも後述する。



第38圖 小野穴389出土木製品其別圖(1:2)

Ⅶ ま と め

B・C区-80以南の山林の一部を残して遺跡は消滅することとなる。この一部の山林は遺跡全体の規模からすれば1割にも満たず、遺跡のほぼ全貌が今回の調査で明らかとなったといえる。当初積算したよりも多くの期間と予算を費やすことになってしまったが、集落ではない遺跡の性格からして、抽出的な数基のグリッド調査や数条のトレンチ調査では、どこに存在するか予測のつかない落とし穴や集石炉を跨いで取りこぼしてしまう恐れがあったので、尾根頂部から尾根端部までの全面的な調査は止むを得なかったものと振り返っている。

結果、集石炉または焼跡集積土坑と呼ばれている小竪穴5基、落とし穴31基を含む415基もの小竪穴と、小竪穴以外の遺構5基を発見するに至った。これらが遺構の性格からして、遺構の時期を決定づける遺物を出土することが稀な遺構であることは、当遺跡も例外ではなかった。しかしながら、先学の論展開や既報告の遺跡群の集積は、地道な成果を着実にあげているようで、本稿を起こすうえで学んだ資料により、ある程度の類推を当遺跡に援用することは可能である。遺構の多くは遺構内外から検出される遺物により、縄文時代に帰属するものと思われ、縄文時代の狩猟や生業を考究する一助になり得る資料が提示できたと思われる。今回、調査担当者が特に興味深く感じた、倒木痕の調査についてと落とし穴について雑談な考えを述べ、まとめにかえる。

1 倒木痕の調査について

倒木痕上に5基の遺構が見つかった。4基は焼土跡、1基は集石である。倒木痕自体は、それが倒木痕であるとされて以来、自然現象すなわち遺構ではないとして、あまり調査されなくなっているようである。当遺跡においても、遺跡全体で数多くの倒木痕が存したものの、検出時点で倒木痕と分かるものは見向きもせず、小竪穴と誤認して小竪穴番号を登録したものの、掘り下げ段階で倒木痕であることが判明するや否や放棄して、登録番号は欠番としている。それらの正確な数量もカウントしていないし、位置も記録していない。しかしながら遺跡を営んだ人々の生活域で倒木があると、それを利用した2次的な遺構に成り得ることは今回の成果からも明らかである。倒木の根によって上方に持ち上げられたロームは、従来ロームマウンドと称されてきた状態のものを残すが、そのロームが持ち上げられて陥没している自然の穴は、たき火場所やごみ捨て穴として格好の窪地であったことは容易に想像される。

集石1は偶然の重なりとも考えられるが、窪んでいることで集石を配し易かったといった理由でわざわざ倒木痕を選択しているとも推測できる。この集石は円礫主体で被熱しておらず、大きさも一定範囲内であることが興味深い。周縁部には自然礫の分布はなく、尾根頂部に近い位置に、

一定範囲内の大きさの円礫ばかりを集め、運んできて配した理由は判然としない。またその時期も明確にできない。

焼土跡4基は、明らかに倒木によって生じた窪地を利用したもので、火を焚くには風の影響を受けにくく、焚き火用の穴をわざわざ穿つよりは、労せずして最初から穴が開いているのだから絶好の場所であったことであろう。残念ながら遺物を伴わず、遺構の時期さらには倒木のあった時期を明らかにできない。

このような倒木によって生じた穴の利用は、当遺跡のような性格の遺跡よりもむしろ、集落遺跡ほど利用の頻度は高く、ごみ捨て穴のような場合にはなおさら遺物を伴い易くなると思われるので、調査する意義はより大きい。また、全く利用されなかったとしても、集落遺跡内では埋没過程で遺物が流没する確率も高いため、単に遺物を拾う目的でも倒木痕を調査する必要がある場合もあろう。

更に倒木痕の利用の例として、当遺跡に続いて原村教育委員会により96年度調査された清水遺跡では、倒木痕と平安時代の竪穴住居跡との重複が3箇所確認されたということが挙げられる。これらは偶然の重なりではなく、土が柔らかく竪穴を掘り易いといった利点から意図的に倒木痕上を居住選地したものと考えられる。危うく倒木痕を、床面上の巨大ピットと誤認するところであった。

このように倒木痕は様々な形で利用されている。今回見つかった4つの焼土跡は、たまたま検出面に焼土が露出していたために発見に至ったが、焼土の上を自然埋没した腐植土が完全に覆っていたとしたら、調査には至らなかったであろう。逆を言えば、全く調査しなかった倒木痕にも、内部に焼土や遺物を含むものがあって、知らずに終わったのかもしれないということである。昨今調査されることの少ない倒木痕だが、以上のようなことから次の2点が挙げられる。第一に、倒木痕を利用して二次的な遺構が形成される場合があるということ。第二に、単に自然に埋没した場合でも遺物を含む場合があり、それは集落遺跡ほどあり得、全く調査しないで良いとは言いつてもいいということ。以上を踏まえても、倒木痕の調査は調査期間・調査人員・予算といった事象との兼ね合いの中で調査の是非が検討されよう。当遺跡の調査では、倒木痕についてはこれ以上の調査は成し得なかった。

2 落とし穴について

① 「おとしあな」に当てる漢字について

ある意味では末梢的な問題かもしれない「おとしあな」に当てる漢字について先ず述べる。「おとしあな」には「落とし穴」という字を用い、「陥し穴」という字は当てないこととした。これには理由がある。

「陥し穴」という当て字は落とし穴研究の先駆となった「霧ヶ丘」以降と考えられる。霧ヶ丘

では2つの論考において「陥し穴」が用いられている(今村1973・宮本1973)。最初に落とし穴を指摘した城之平遺跡の「蓼科」(宮坂・宮坂1966)では「落とし穴」、霧ヶ丘でも別の2つの論考(石川1973・榊原1973)では「落とし穴」である。その後の落とし穴研究では「陥し穴」が多く用いられ、今や主流となりつつある。霧ヶ丘以降の追隨と考えられる。これに敢えて疑義を唱えるのは次の3つの理由による。

第1に「陥し穴」は中国語の「陥井」に由来すると思われるが、実際の漢字の読みとして存在しない点。第2に考古学を離れても「落とし穴」に普遍性がある点。第3に、狩猟の主体はあくまでも人間であって対象獣は狩猟の客体であるが、「落とし穴」の方がそのことを明確に示していると思われるという点。

詳述する。漢和辞典を調べると「陥」は、「陥る」と書いて「おちい・る」と読み、おちこむ・穴におちる・はまる・はまり込む・計略にかかる等の意味があり、「陥れる」と書いて「おとし・れる」と読み、おちこませる・はめる・計略にかける等の意味がある。意味は後者において全く適切であるが、かといって「陥る」と書いて「おち・る」や「陥す」と書いて「おと・す」という読みはあり得ない。(尚「落とし穴」についても正しい送り仮名は「落とし穴」である。)2点めは、考古学に無縁な人を10人なり100人なり選んで漢字で書いてもらえば明白で、殊更にこの学界だけ字を特殊化する理由は全くないということである。3点めは、動物が意に反して「おちいる」のではなく、人間が「おとす」ことを最初から目的として構築して動物を「おとす」のであるから、「落とす」と書いた方が人間=主体、動物=客体の関係が明確であると思われる。「陥」は「おとしれる」よりも「おちいる」の方が第一義であることから「おちいる」の意味合いの方が強く、落とし穴を構築した人間よりも動物の方が落とし穴の主体であるかのようなニュアンスが生じやすい。対象獣がその意志に反し、あるいは予期せずして「おちいる」というニュアンスをわざと狙っているフシもあるが、これは上述のような理由で妥当ではないと考える。以上の事象が「落とし穴」と表記する理由である。

② 落とし穴の類型

前置きが長くなったが本題に入る。今回見つけた31基の落とし穴には、平面形状・坑底小孔・分布域にいくつかの傾向がつかめる。先学の落とし穴の分類には様々なものがある。例えば、霧ヶ丘における今村分類と石川分類(1973)に先ず始まり、関東とその近県を含む複数の遺跡を総合した宮沢・今井分類(1976)、岩手県内の瀬川分類(1981)と田村分類(1987)、多摩ニュータウン遺跡の各分類(小坂井1983・小島1984・栗城1986・小松1986・武井1987・佐藤1989・中西1991・小坂井1991)、小山田遺跡群の掘金分類(1983)、館町遺跡の清水分類(1985)、九州の高橋分類(1994)などがある。しかしながら当遺跡にこれらの分類のいずれかを充当しようとするれば、できなくもないがどうもしっくりとつかないものがあると感じた。その理由は次のような点にあるのではないかと考えた。

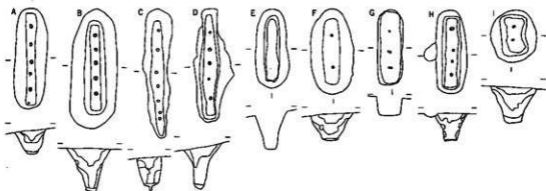
第一に、既に行われている分類は一定の時期に存続したものを対象としているものが多いと考えられる点である。例えば、関東で行われている分類は縄文早期後半を主体とするものである。当遺跡のものももっと長い時間幅にわたって構築されたものの累積ではないかと考えている。

第二に、既に行われている分類の範疇では主流たり得ない類型が当遺跡では主流として存在している反面、既に行われている分類では主流の類型が当遺跡では存在していないといった事がある。関東に見られる類型、更には当原村に隣接する茅野市の各遺跡で近年多数見つかった類型でも決して主流に成り得ない類型が占める率が当遺跡には多い。このことは第一の理由ゆえ当然の事であろう。

第三に、坑底小孔の数にこだわった分類が多く見られるが、私はこれにはあまり意義を見いだせない。とりわけ当遺跡に多く存在する細長い形状のもの坑底小孔の数は、その長さに応じて順次流動的に決定されるのではないかと考えられる。また、再利用の結果として坑底小孔の数が累積したものも少なくなく、一回に用いられた数を見極めなければ、単純に坑底小孔の数だけをカウントしても意味がない。

第四に、坑底の仕掛けが埋設方式か、打ち込み方式かという論議やそれによる分類があるが、当遺跡では調査時点の認識不足のため、この事を明らかにする載ち割り調査を、ごく一部の落とし穴でしか実施せずに調査を終えてしまった点にある。

これらのことから、落とし穴について以下に当遺跡独自の分類を試みてみたい(第39図)。隣接の茅野市でも各遺跡の報告で分類が成されているが、これらは落とし穴以外の土坑全般についての分類であり、これによって落とし穴をどう論じようというものではなく、あくまでも報告上の便宜的なものようである。以下の分類も上述の既にある分類を否定するものではなく、あくまでも当遺跡の報告上の便宜的なものである。分類には、検出面の平面形状・坑底の平面形状・坑壁の形状・1セットと考えられる坑底小孔の数の幅、の4点を考慮した。結果、以下のA～Iの8類型を示す。



第39図 芝原尾根遺跡の落とし穴の8類型

- A：上面が長円形、坑底が溝状の長方形で、壁が傾き、坑底小孔が5つ以上のもので、小竪穴187が相当する。
- B：上面が長円形～隅丸長方形、坑底が溝状の長方形または溝状で、壁が途中で屈折し、坑底小孔は5つを基本とするもので、小竪穴8・186・228・346・389・425の6基が相当する。小竪穴346のみ坑底小孔が4つである。壁の屈折の仕方は、下半が垂直に近く、上方が開放する朝顔形・漏斗形の形状である。
- C：上面・坑底ともに溝状で、壁は垂直に近いが若干傾き、坑底小孔は5つ以上のもので、小竪穴102・103・111・115の4基が相当する。
- D：上面・坑底ともに溝状で、壁は屈折、坑底小孔5つ以上のもので、小竪穴106・123の2基が相当する。壁の屈折の仕方は、Bと同じである。上面の平面形は溝状であるものの、坑中央部のみ外側へ開放する傾向がある。
- E：上面が長円形、坑底が溝状で、壁は屈折し、坑底小孔をもたないもので、小竪穴4のみである。壁の屈折の仕方は、B・Dと同様である。
- F：上面は陸上のトラックのような長円形、坑底は長方形で、A～Eに比して1.5～3倍の坑底幅があり、壁は傾き、坑底小孔が2つか3つを基本とするものである。小竪穴172・192・209・237・312・355の6基が相当する。
- G：上面・坑底ともに陸上のトラックのような長円形または隅丸長方形、A～Eの1.5～3倍の坑底幅があり、壁は傾き、坑底小孔は2～4基を基本とするもので、小竪穴6・13・121・185の4基が相当する。
- H：上面は長円形または隅丸長方形で、坑底はA～Eの1.5～3倍の坑底幅をもつ長方形、壁はB・D・Eと同様に屈折し、坑底小孔は2～4基のもので、小竪穴223・244・406の3基が相当する。小竪穴223は坑底幅がもう少し狭いとBとし得るかもしれない。
- I：上面は円形に近く、坑底は長方形または中くびれの楕形で、壁はB・D・E・Hと同様に屈折し、坑底小孔は1～3である。小竪穴5・325・326・354・359・429の6基が相当する。

以上の8類型を坑底小孔の限定的な数でも分類すると、C5型、C6型、H2型、H4型などというように類型数は更に増えるが、これは既に述べたような理由で意義が無いばかりか繁雑さが増すだけである。むしろ、類型数を減らすように考える方がより意義を見いだせる。

例えば、A～Dは坑底が溝状で坑底小孔が5つ以上という点で、ひとつのタイプであると見なすこともできる。とりわけ検出面における平面形状は、先学の分類法でも指摘があるように、実際に何処から掘り込まれたものが明らかにできない以上、当てにならない面がある。A・Cのタイプの5基は、検出面よりずっと上方より掘り込まれていた可能性があり、その場合上方では開放していたと考えられる。即ちBのタイプに接近する。

また、FのタイプとGのタイプも坑底のつくり出しが明確に分けられる訳ではなく、主観の間

題もあって判断に苦慮する場合もあり、不可分な状況にあるだろう。

概観すると、主に次の4つに大きく分けることも可能ではないだろうか。

A～Dの、上面の長幅比3:1以上と細長く、坑底が溝状で長幅比5:1以上、坑底小孔5つ以上のタイプ。

Eの、上面の長幅比3:1と細長く、坑底の長幅比が5:1の溝状で、坑底小孔をもたないタイプ。

F～Hの、上面の長幅比2.5～3:1、坑底の長幅比3～5:1で、坑底小孔が2～4のタイプ。

Iの、上面の長幅比2:1以下で円形に近く、坑底の長幅比2～3:1で、坑底小孔1～3のタイプ。

形態の比較を隣接する茅野市と行ってみると、A・Bのタイプは稗田頭A遺跡にわずかに認められるが、A～Dのタイプは茅野市ではほとんど存在しておらず、Eのタイプは天狗山遺跡などわずかに見られるが当遺跡同様に希有である。F～Hのタイプは茅野市にも天狗山・梵天原・上の平遺跡など多くに見られる。梵天原遺跡の分類では第I群1類、上の平遺跡の分類では第II群2類とするものに似た形状のものが多く見られるが、当遺跡のものの短軸の断面はHのタイプを除いてあまり漏斗状の形状を示していない。Iのタイプも茅野市には多く、梵天原遺跡の分類では第I群2類、上の平遺跡の分類では第I群5類・第II群1類とするものに酷似するものがある。

原村内の落とし穴は白ヶ原遺跡において6基、御射山遺跡で1基が見つまっているが、白ヶ原遺跡のFのタイプ2基以外は、当遺跡の分類では捉え難い。

③ 上方が開放する落とし穴の形状について

B・D・E・H・Iの落とし穴では、坑底から途中までは垂直に切り立ち、途中で角度がついて上方では外側へ向かって開いている。即ち、朝顔形・漏斗形・ラッパ形の形状である。これは、短軸方向で特に顕著であり、この形状を成す落とし穴は、落とし穴全体に占める比率にして55.4%と半数を越える。前述のように落とし穴の検出面と落とし穴の構築時の地表面とが一致しないと考えられるため、実際の比率は更に高まると考えられる。この形状は上方が崩れたものとされる場合があるが、今回の調査で見つかったものは崩れではあり得ず、当初よりこの形状を成していたものと考えられる。とりわけ、B・Dのタイプは、坑壁に掘削痕がよく確認でき、上方が崩れた訳ではないことがよく判る。この形状は、「開口部を落し捕獲する部分、中断から坑底までを捕獲したものが身動きできなくなるように拘束する部分と、部位による目的が定まっていた」(小林1991)とするのに賛同できる。

更に特徴的な状態として、短軸の断面を観察すると坑底から坑壁の途中まで、地山酷似の極めて大きなローム・ブロックが坑壁際に貼り付いているものが見受けられる。この傾向は、小笠穴13・102・103・111・172・186・209・228・346・359・389・406・425といった多くの落とし穴で

認められ、とりわけ小竪穴102ではこれを地山と誤認して狭く掘りあげ、完掘写真まで撮影してしまっただろう。このローム・ブロックも従来崩れと考えられてきたものである。つまり、上部の崩れ=開口部、その崩落土の堆積=このローム・ブロックという図式で論じられてきたのではないだろうか。しかし、崩れでもっと無秩序な状態を成すはずであり、坑壁にピッタリ貼り付くという状態では堆積しないであろう。決して三角堆土などではあり得ない。これは坑底を当初からTビット状に掘るのではなく、まずU字状に掘ってから「貼り壁」を行って最終的にTビット状に仕上げるといふように考えると、落ち込んだ捕獲獣の四肢の自由を束縛するという前述の機能をより高めることに成り得る。この場合、土坑として実際に機能していたのは小竪穴102で狭く掘りあげて完掘写真を撮った形状そのものということになり、坑壁際のローム・ブロックを取り除いた、通常完掘状態としているものは掘り形という事になる。同様な所見は泉理蔵文化財センターによって当遺跡と同年に調査された、茅野市の笹原上遺跡でも得られ、そちらで詳しい報告があることであろう。

④ 落とし穴の立地

尾根頂部や尾根平坦部に位置するもの、緩斜面に位置するもの、急斜面に位置するものがあり、更には長軸が等高線に対して平行なもの、垂直なもの、斜方向のものなど、多岐にわたる。散漫且つ無秩序にも思えるが、一定の傾向が窺える。

A～Dのタイプは尾根頂部か尾根頂部よりやや北斜面に下がったところに単独といっていいほどに散在するか、急斜面に集中する。尾根頂部に位置するものは、尾根の方向と同方向、即ち等高線と垂直な方向に長軸をとり、尾根頂部よりやや北斜面に下がったところに位置するものも尾根の方向と同方向、即ち等高線と平行な方向に長軸をもっている。K区小竪穴8だけは尾根頂部よりやや北斜面に下がったところに位置しながら、等高線と垂直方向に長軸がある。急斜面に集中するものは、長軸が等高線に対して斜方向のものもあるが、多くは斜面の方向と同方向、即ち等高線と垂直の方向にある。集中箇所は東尾根K区の南斜面と西尾根F区の北斜面である。しかしながら、集中している群の併存性は立証できない。

F～Hのものは散在し、一定の傾向を抽出するのは困難であるが、急斜面には存在せず、尾根頂部か緩斜面にあり、全般に等高線方向すなわち斜面と垂直方向に長軸をもっている。

Iは、D・E区だけに存在し、E区の小竪穴5は単独、D区のものは集中して構築されている。しかしながら、D区のもの果積の結果なのか同時に存在したのかは分からない。

従来研究成果では、落とし穴は谷を意識し、谷に向かって構築されるとされるが、この傾向はA～Dのタイプに顕著である。

⑤ 坑底施設の設置方式

落とし穴の坑底施設が埋設方式か打ち込み方式かという議論が今まで成されてきている。最近

の調査では載ち割り調査の実施により、ほとんどの落とし穴の坑底施設は埋設方式である、即ち掘り形をもっているということが判ってきたとされる。しかし、これは縄文早期後半を主体とする関東地方のものに言えることであって、このことを盲目的に当該地方の落とし穴にも援用することはできないと私は考えている。また多摩ニュータウン遺跡では、両者の境を坑底小孔の口径15cmを越えるか否かというあいまいな基準で分けている場合もあり、この基準で判断すれば当遺跡の坑底小孔はすべて15cm以内、つまりすべて打ち込み方式ということになってしまう。もちろん、この議論は載ち割り調査をすべての落とし穴に実施した後に論じ得る事になるが、前述のようにごく一部のものではしか実施できなかった。しかし、その一部のものの結果と他の事象を加味して確実に指摘できることがあるので詳述する。

Iのタイプでは、1基も断ち割り調査を実施していない。調査時点ではすべて打ち込んでいるものと捉えたが、円形に近いタイプは関東地方に多く見られ、掘り形を設けて複数の棒状施設を埋め込むことが分かってくる。このことから、Iのタイプが掘り形をもっていた可能性がある。一穴タイプの小堅穴5は、他の落とし穴に比して底部小孔の口径が大きく、掘り形をもっていたとも考えられる。また、小堅穴325・326・359・429のような底部小孔がより小さくて集中または近接するタイプも、関東地方同様に掘り形を設けてから複数の棒状物を突き立てた可能性が考えられる。

次にF～Hのタイプも、調査時点ではすべて打ち込み方式と判断した。底部小孔は木質部の太さしかなく、掘り上がった小孔は木質部の腐朽部分である。この周囲にロームの突き固めが行われたか否かは載ち割り調査の結果判断ということになるが、平面調査でも次の点が指摘できる。再利用している落とし穴（小堅穴6）及び再利用の疑いのある落とし穴（小堅穴121・312）では、2度目の孔を穿ったとき、近接する1度目の坑は2度目の孔の掘り形に取り込まれ、残存しないはずである。しかし、これが残存しているということは打ち込み方式によるということの証しである。このことがもっともよく判るのは小堅穴6であり、これと同タイプの小堅穴13・172・192・209・237・406も打ち込み方式であった可能性が高い。

更にA～Dのタイプは打ち込み方式であると断言できる。小孔内に木質部が残存した小堅穴228・389（Bのタイプ）では、これらの取り上げを行なう際載ち割りを行ったが、均質なハードロームの地山で掘り形はなかった。また、小堅穴244（Bのタイプ）でも調査の最後に攪乱の崖を利用して、載ち割りを行ったが掘り形はなかった。小堅穴111（Cのタイプ）では調査時、作業員が掘り過ぎてしまい、底を抜いてしまった。坑上半は地山がローム、坑底付近は地山がスコリアであったが、掘り過ぎた底部においても小孔＝木質部の径しか残っておらず、小孔とスコリアの間にはロームが認められない、すなわちロームの突き固めがなく小孔の周囲は均質なスコリアであった。ロームを全く用いず、あるいは偶然にも混ざることなく、締まりのないスコリアを突き固めることは考えられない。さらに、Gのタイプの小堅穴6について上述したように、小堅穴111にも再利用の結果である打ち直し痕が認められるため、この点からも小堅穴111は打ち込み

方式によることが判る。

決定的に打ち込み方式であることは小竅穴389で出土した木質部が物語っている。これは先端が鋭利に調整され、角材のような面取りがなされている。「縄文時代にはノコギリがないので木を最短距離で切ることはできない。石斧を何度も打ち当てて切った木の先端は必然的に尖る。したがって先端が尖っているからといって杭であるとは限らない」という指摘を整理段階で受けた。しかし実測図では判りにくいが、小竅穴389出土の木製品の実物を見れば、誰しもそれが明らかに杭として調整され、切りつばなしの材でないことは瞬時に理解できる。このことからA～Dのタイプの坑底施設が打ち込み方式であることは間違いない。

従って、A～Dのタイプは確実に打ち込み方式によるものであり、F～Hのタイプも恐らくは打ち込み方式によるものであろう。以上のことから、坑底小孔のないEタイプ、上面の形状が円形に近いIのタイプを除くと芝原根遺跡の少なくとも8割の落とし穴の坑底施設が打ち込み方式により設置されていることが指摘でき、この点でも関東地方の落とし穴群とは大きく異なっている。

坑底に木杭を打ち込んだ場合、捕獲獣に致命傷を与えるように逆茂木として上端を調整するには、打ち込んだ後に調整しなければならない。これは明らかに仕掛けの設置上不合理であり、非能率的である。したがって上端は尖っていなかったと考える方が自然で、捕獲獣を串刺しにするものではなく、捕獲獣の四肢が坑底に接地しないようにしたり、坑壁に引っ掛からないようにしたりする、すなわち宙ぶらりんの状態で動物の自由を奪うという主旨の仮説（今村1973）に賛同できる。捕獲獣の肉が腐らないためには死なずにもがいていた方がいい、更には異臭ならば見巡りのインターバルを長くすることもできるという点で、先端が尖っている必要はない。捕獲獣の肉の鮮度や毛皮の採取を考えるとこの方が理に通っている。

⑥ 落とし穴の時期

落とし穴群の時期は縄文時代であろうとは思われるがそれ以上は判然としない。これは小竅穴185の土器片、小竅穴228・389の木片・木製品を除き遺物が出土しないため、先学の研究成果との比較検討により形状で類推するほかない。また仮に遺物が出土したとしてもその遺物のみで時期判定を行うのは帰属性が疑わしく極めて危険である。例えば、平安時代に構築された小竅穴でも埋設過程で縄文土器片を取り込むことは十分に考えられるため、その遺物は時期の上限しか示さないことになる。つまり、落とし穴から出土する遺物が意図的に埋置されたことが判るものではない限り、落とし穴を特徴づける遺物とは成り得ない。

形状による類推では、Iのタイプは隣接の茅野市の調査結果から、主に縄文時代早期後半に比定され得るが下限は中期初頭まで下る可能性もある。参考までに全国の例も挙げる。関東地方に普遍的にみられる早期後半とされるタイプも平面形状や坑底小孔の特徴は似ているものが多くあるが、それらは当遺跡や茅野市例のように短軸の断面形が顕著な漏斗形を示すものはあまり多く

ない。短軸の断面形状が漏斗形を成す点を除いては同形状のタイプは東北～九州まで存在し、東北を除くと普遍的であるが、北陸地方では前・中期、中国地方では早期にもわずかにあるが多くは後・晩期、九州地方では早・前期を主体として晩期までと、形状による比較だけでは判然としない。主流の形状ではない東北地方では早・前期に推定され、北海道ではほとんど見られない。当遺跡のⅠのタイプの坑底施設の設置方式は調査時点では打ち込み方式と捉えたが、打ち込み方式は北陸地方で多く認められている。

F～Hのタイプは関東・東北・九州にも似た形状のものがあるが、それらを持ち出すまでもなく茅野市・諏訪市に良好な調査例が多い。茅野市の調査結果からは中期初頭以前とされ、諏訪市のジャコッパラ遺跡のⅠ区A4号小竪穴では炭化物のC14年代測定により前期後半から中期前半が与えられている。

Eのタイプは希有なため時期に関しては判然としない。全国の例では底部無小孔のものも少なくないが、形状的にはEのタイプと異なっている。

隣接する茅野市にもあまり認められないA～Dのタイプは、主流たり得ずに関東全般にも分布しているが、多くは東北地方に見られ、中期末～後期前半の所産とされている。しかしながら、むしろEのタイプを更に長くしたような形状の底部無小孔のものの方が主流で、このようなタイプは東北・北海道と県内では飯山市に見られる。したがって、坑底小孔が必ず5基以上ある当遺跡は特異な傾向にありそうである。諏訪市のジャコッパラ遺跡のⅠ区A5号小竪穴は当遺跡のBのタイプに相当し、坑底に近い層の炭化物のC14年代測定では前期後半から中期前半とされている。また、当遺跡と同年度に調査された原村内の清水遺跡では、Bのタイプが中期後半の住居跡の床面を壊して構築されており、それ以降であることが分かる。しかし、下限がどこまで下るかは判然としない。実際に山梨県丘の公園第5遺跡では当遺跡に酷似するBのタイプが見つかり、坑壁の明瞭な掘削工具痕が金属製を思わせるためか、「古代以降、特に中世あたりの所産」と報告されている。実際にB～Dのタイプのものは、①掘削痕が極めて明瞭なものが多い、②前述の“貼り壁”工法のものが多い、③坑底施設が間違いなく打ち込み方式による、などの特徴がある。小竪穴389（Bのタイプ）の木製品は杭先の調整が精巧で、縄文時代の所産であることには疑義を抱かせるものである。現在のところ小竪穴228・389の木片・木製品にはC14年代測定を実施しておらず、これらの時期を呈示できない。以上のことから、A～Dのタイプが縄文中期には確実に出現しており、古代以降にも存続あるいは再出現する可能性が考えられる。

雑漢ながら落とし穴の時期について述べた。大雑把にはⅠのタイプ→F～Hのタイプ→A～Dのタイプという変遷がたどれそうである。落とし穴については時期判定材料に欠けることが今後とも調査する当初より分かっているので、是非とも何らかの手だてを講じる必要がある。その場合、坑底施設の木製品以外の土器片・石器などの遺物は当てにならない。「出土遺物の時期は陥し穴の時期とは殆ど関係ないのが一般的と見るべき」・「陥し穴から遺物が出土する場合、その地に既にある遺物包含層から掘り上げられたものが混入したと見るべき」という論旨（高橋1994）には

大いに賛同する。八ヶ岳山麓地域では、時期の特定できる土層（例えば火山灰など）も期待できない。他遺構との重複関係も稀にしかあり得ない。最も有効と考えられるのは、ジャコッバラ遺跡の実践のように落とし穴の遮蔽物と見られる炭化物による年代測定であろう。落とし穴の最下層である坑底直上には、黒色粘質の層が堆積していることが少なくない。これは落とし穴の遮蔽物であったという推定もでき、この層中の炭化物を落とし穴の類型別にサンプリングすることが今後肝要になると思われる。今回の調査では遺構実測や完掘写真撮影を優先するあまり、この最下層を何の疑問ももたずに排土置き場へ運ってしまったことが悔やまれる。勿論、年代測定は調査予算との兼ね合いの中で初めて可能となることであろうが、落とし穴の研究にはデータの累積が不可欠ではなからうか。

引用・参考文献

- 宮坂英次・宮坂虎次 1966 「別編 城之平壑穴群遺構遺跡」『夢科』
- 今村啓爾 1973 「霧ヶ丘遺跡の土壌群に関する考察」『霧ヶ丘』第2部 考察篇 霧ヶ丘遺跡調査団
- 石川和明 1973 「土壌群についての考察」『霧ヶ丘』第2部 考察篇 霧ヶ丘遺跡調査団
- 橋原松司 1973 「葬場についての一私考」『霧ヶ丘』第2部 考察篇 霧ヶ丘遺跡調査団
- 宮本常一 1973 「陥穴」『霧ヶ丘』第2部 考察篇 霧ヶ丘遺跡調査団
- 今村啓爾 1976 「縄文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較」『物質文化研究会』
- 宮澤 寛・今井康博 1976 「縄文時代早期後半における土壌をめぐる諸問題 - いわゆる落とし穴について -」『調査研究集録』第1冊 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 瀬川司男 1981 「陥し穴状遺構について」『紀要1』(財) 岩手県埋蔵文化財センター
- 村田文夫 1981 「縄文時代の土壌は陥か - 松山義雄著「狩りの語部」から -」『かけら』第2号 日本大学先史学会
- 小松貞名 1981 「N o. 804遺跡 III 土坑の調査について」『東京都埋蔵文化財センター調査報告第1集 多摩ニュータウン遺跡』(第4分冊) (財) 東京都埋蔵文化財センター
- 小坂井孝修 1983 「N o. 511遺跡 IV まとめ 土坑について」『東京都埋蔵文化財センター調査報告第4集 多摩ニュータウン遺跡』(第1分冊) (財) 東京都埋蔵文化財センター
- 堀金 晴 1984 「小山田 N o. 15遺跡 III 縄文時代の遺構と遺物 4 土坑」『小山田遺跡群IV』小山田遺跡調査会
- 齊藤 進・小島正裕 1984 「N o. 740遺跡 III 遺構と遺物 6 土坑 (陥し穴)」『東京都埋蔵文化財センター調査報告第5集 多摩ニュータウン遺跡』(第7分冊) (財) 東京都埋蔵文化財センター
- 清水比呂之 1985 「第Ⅲ章 第1節 土坑形態の規格性とその変遷」『館町遺跡 I』八王子市館町遺跡調査団
- 伊藤 健 1985 「第Ⅲ章 第2節 土坑の構築法 - 坑底施設の構造把握 -」『館町遺跡 I』八王子市館町遺跡調査団
- 山口剛志 1985 「第Ⅳ章 第3節 陥穴における群の存在とその意義」『館町遺跡 I』八王子市館町遺跡調査団
- 伊藤 健 1986 「第Ⅳ章 第1節 土坑の構造把握 - 坑底施設批判 -」『館町遺跡 II』八王子市館町遺跡調査団
- 栗城謙一 1986 「N o. 406遺跡 III 遺構と遺物 2 縄文時代 1) 遺構 F 土坑」『東京都埋蔵文化財センター調査報告第7集 多摩ニュータウン遺跡』(第2分冊) (財) 東京都埋蔵文化財センター

- 小松眞名 1986 「No.597遺跡 III 遺構と遺物 1 縄文時代 1) 遺構 A 陥し穴土坑」「IV まとめ」「東京都埋蔵文化財センター調査報告第7集 多摩ニュータウン遺跡」(第4分冊)(財)東京都埋蔵文化財センター
- 平出一治・日蓮 厚 1986 「3 いままでの調査」「御射山遺跡」原村教育委員会
- 田村社一 1987 「陥し穴状遺構の形態と時期について」「紀要VII」(財)岩手県文化振興事業団・埋蔵文化財センター
- 伊藤 健 1987 「第三章 第1節 土坑群の構造把握 -狩猟領域立地研究序説-」「館町遺跡III」八王子市館町遺跡調査団
- 武井利道 1987 「No.386遺跡 III 遺構と遺物 1 縄文時代 1) 遺構 A 土坑」「IV まとめ」「東京都埋蔵文化財センター調査報告第8集 多摩ニュータウン遺跡」(第2分冊)(財)東京都埋蔵文化財センター
- 武蔵雄六・平出一治 1987 「IV 遺構と遺物 1 縄文時代の遺構」「IV 小堅穴について」「白ヶ原遺跡」原村教育委員会
- 五味裕史 1988 「IV 遺構と遺物 1. 1区」「ジャコッバラI」諏訪市教育委員会
- バリノ・サーヴェイ株式会社 社本崇夫 1988 「IV 遺構と遺物 4. 陥し穴状遺構の機能した時期と遺産物として利用された植物」「ジャコッバラI」諏訪市教育委員会
- 佐藤宏之 1989 「陥し穴系と縄文時代の狩猟社会」「考古学と民俗誌 渡辺仁教授古稀記念論文集」六興出版
- 佐藤宏之 1989 「No.426遺跡 III 遺構と遺物 2 縄文時代 1) 遺構 B 土坑」「東京都埋蔵文化財センター調査報告第10集 多摩ニュータウン遺跡」(第5分冊)(財)東京都埋蔵文化財センター
- 武井利道 1990 「No.789遺跡 III 遺構と遺物 1 縄文時代 1) 遺構 D 土坑」「東京都埋蔵文化財センター調査報告第11集 多摩ニュータウン遺跡」(第1分冊)(財)東京都埋蔵文化財センター
- 保坂康夫 1990 「第5章 縄文時代の遺構と遺物 第1節 陥し穴」「第8章 古代以降の遺構と遺物 第1節 陥し穴」「第10章 結語 陥し穴の立地」「丘の公園第5遺跡」山梨県埋蔵文化財センター
- 稲田孝司 1991 「西日本の縄文時代陥し穴系」「論苑考古学」天山舎
- 中西 充 1991 「No.366遺跡 III 遺構と遺物 2 縄文時代 1) 遺構と遺物 A 土坑」「東京都埋蔵文化財センター調査報告第12集 多摩ニュータウン遺跡」(第1分冊)(財)東京都埋蔵文化財センター
- 小島正裕 1991 「No.213遺跡 III 遺構と遺物 2 縄文時代 1) 遺構 A 土坑」「東京都埋蔵文化財センター調査報告第12集 多摩ニュータウン遺跡」(第4分冊)(財)東京都埋蔵文化財センター
- 小坂井孝修 1991 「No.382・384遺跡 IV 成果と問題点 縄文土坑について」「東京都埋蔵文化財センター調査報告第12集 多摩ニュータウン遺跡」(第4分冊)(財)東京都埋蔵文化財センター
- 小林深志 1991 「第V章 まとめ 第2節 縄文時代 (I) 土坑」「上見遺跡」茅野市教育委員会
- 1992 「No.107~109遺跡 III 遺構と遺物 1 縄文時代 1) 遺構 A 土坑」「東京都埋蔵文化財センター調査報告第14集 多摩ニュータウン遺跡」(第3分冊)(財)東京都埋蔵文化財センター
- 小島正裕 1992 「No.496遺跡 III 遺構と遺物 2 縄文時代 1) 遺構 C 土坑」「東京都埋蔵文化財センター調査報告第14集 多摩ニュータウン遺跡」(第3分冊)(財)東京都埋蔵文化財センター
- 安斎正人・佐藤宏之 1993 「マタギの土俗考古学 -岩手県沢内村での猟民の調査」「古代文化」11(財)古代学協会
- 大野高子 1993 「縄文時代早期~前期の陥し穴状土坑について」「湘南藤沢キャンパス内遺跡第1巻 総論」慶應

殺整

- 百瀬一郎 1993 「第IV章 遺構と遺物 第5節 土坑」「第V章 まとめ」「天狗山遺跡」茅野市教育委員会
- 青木正洋・五味裕史・高見俊樹 1993 「III 過去における調査」「IV 平成4年度遺跡分布予備調査の概要」「ジャコッパラII」諏訪市教育委員会
- 小島正裕・鶴間正昭 1994 「古代の陥し穴土坑をめぐって」『研究論集』XIII 東京都埋蔵文化財センター
- 高橋信武 1994 「九州の陥し穴の変遷」『先史学・考古学論究 熊本大学文学部考古学研究室創設20周年論文集』
鹿田考古会
- 小林健治・武居八千代 1994 「第IV章 遺構と遺物 第2節 縄文時代(2) 土坑」「神田頭B遺跡」茅野市教育委員会
- 飯山市教育委員会 1994 「第6章 1 縄文時代」「上野遺跡V」飯山市教育委員会
- 長谷川豊 1995 「縄文時代におけるシカ猟の技術的基盤についての研究 - 静岡県・大井川流域の民俗事例調査から-」『静岡県考古学研究』No. 27 静岡県考古学会
- 山本孝司 1995 「No. 951・952遺跡 III 遺構と遺物 1 縄文時代 1) 遺構 D 土坑」『東京都埋蔵文化財センター調査報告第19集 多摩ニュータウン遺跡』(第1分冊)(財)東京都埋蔵文化財センター
- 功刀 司 1995 「第III章 発掘された遺構と遺物 第2節 縄文時代の遺構 4. 土坑」「第V章 結語」『神田頭A遺跡』茅野市教育委員会
- 守矢昌文 1995 「第IV章 検出された遺構と遺物 第2節 縄文時代の遺構 4. 土坑・ピット状遺構」『第V章 調査の成果と課題 第2節 上の平遺跡の落とし穴状土坑について』『上の平遺跡』茅野市教育委員会
- 飯山市教育委員会 1995 「7 VII地区の概要」『小泉弥生時代遺跡』飯山市教育委員会
- 飯山市教育委員会 1995 「第3章 縄文時代 1 遺構 B 土坑」『須多ヶ峯遺跡』飯山市教育委員会
- 功刀 司 1996 「第III章 発掘された遺構 第3節 縄文時代の遺構 5. 土坑」『北山葛蒲沢B遺跡』茅野市教育委員会
- 守矢昌文 1996 「第II章 遺跡の概観」「第IV章 検出された遺構と遺物 第1節 縄文時代の遺構」『第V章 調査の成果と課題 第1節 梵天原遺跡の落とし穴状土坑について』『梵天原遺跡』茅野市教育委員会
- 栗城謙一 1996 「No. 114遺跡 III 遺構と遺物 1 縄文時代 1) 遺構 C 土坑」『東京都埋蔵文化財センター調査報告第28集 多摩ニュータウン遺跡』(財)東京都埋蔵文化財センター

写真図版



写真1 遺跡全景(西から)



写真2 東尾根全景(南から)

写真図版 2



写真3 西尾根全景(東から)

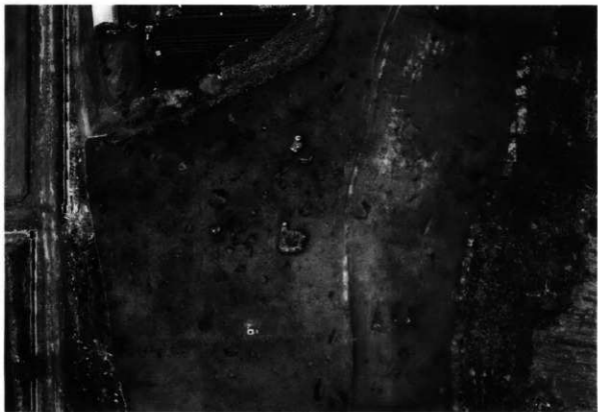


写真4 D・E区遺構分布(東から)



写真5 7年度D～F区検出作業 (西から)

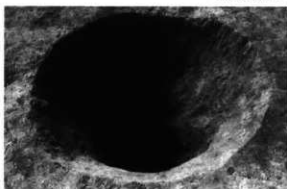


写真6 小堅穴5 (北から)



写真7 小堅穴6 (北西から)



写真8 小堅穴8 (北から)



写真9 小堅穴13 (東から)



写真10 小堅穴102断面 (南から)



写真11 小堅穴103掘削痕 (南東から)



写真12 小堅穴106断面 (東から)

写真図版 4



写真13 小竪穴103・102・115 (南から)

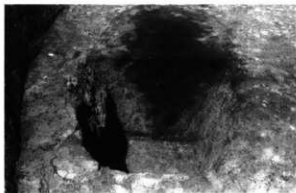


写真14 小竪穴172断面 (東から)



写真15 小竪穴111断面 (東から)



写真16 小竪穴111 (東から)



写真17 小竪穴121 (南東から)

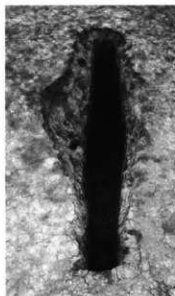


写真18 小竪穴123 (北西から)

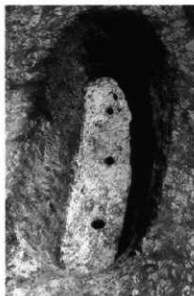


写真19 小竪穴172 (西から)



写真20 小竪穴185 (東から)

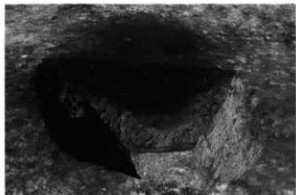


写真21 小竪穴185断面 (東から)



写真22 小竪穴186断面 (南から)



写真23 小竪穴186 (北から)



写真24 小竪穴187 (北から)



写真25 小竪穴192 (北東から)

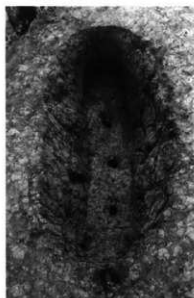


写真26 小竪穴209 (南西から)



写真27 小竪穴223 (西から)



写真28 小竪穴228 (東から)

写真図版 6



写真29 小壑穴237 (北から)



写真30 小壑穴244断面 (北東から)



写真31 小壑穴244 (北東から)



写真32 小壑穴325 (北から)

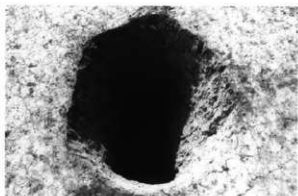


写真33 小壑穴326 (東から)



写真34 小壑穴312断面 (南東から)



写真35 小壑穴312 (南東から)



写真36 小壑穴355 (東から)



写真37 小竪穴389断面 (東から)



写真38 小竪穴389 (東から)



写真39 小竪穴425 (北東から)



写真40 小竪穴389木製品出土状況

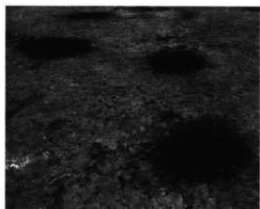


写真41 小竪穴325～327・429検出状況 (北から)

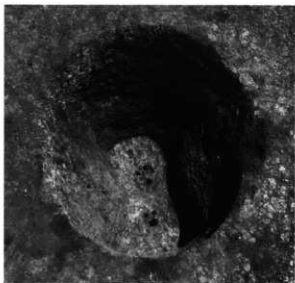


写真42 小竪穴354 (南西から)



写真43 小竪穴359 (北西から)

写真図版 8



写真44 小壑穴406 (北から)

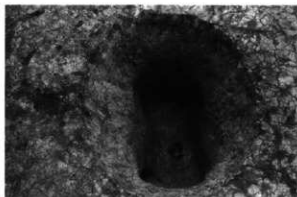


写真45 小壑穴429 (東から)

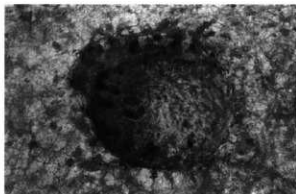


写真46 小壑穴38 (東から)

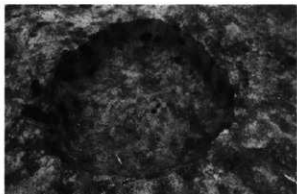


写真47 小壑穴453 (東から)

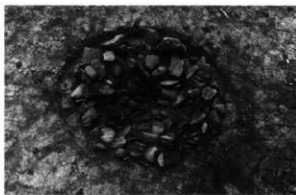


写真48 小壑穴307 (北から)

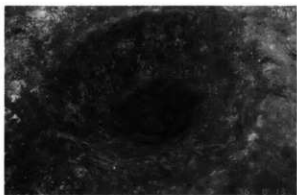


写真49 小壑穴307底部配標 (西から)

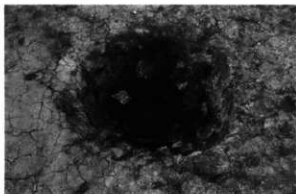


写真50 小壑穴327 (東から)

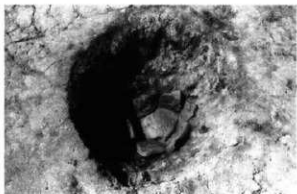


写真51 小壑穴327底部配標 (北から)

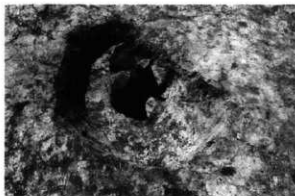


写真52 小竪穴396 (東から)



写真53 小竪穴410 (南から)



写真54 小竪穴459 (北から)



写真55 小竪穴460 (北から)

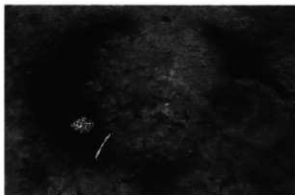


写真56 集石 1 (東から)



写真57 集石1断面 (南から)

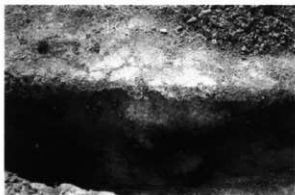


写真58 焼土跡 1 (東から)



写真59 焼土跡 4 (西から)

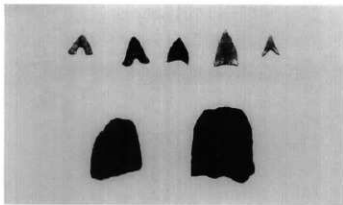


写真60 石鏃(1~5)、打製石片(9・10)

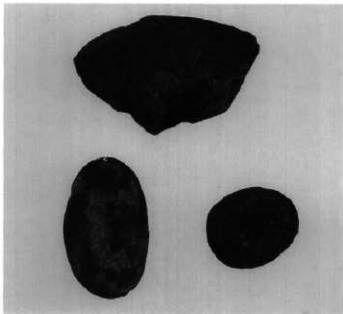


写真61 石皿片(8)、凹(6・7)

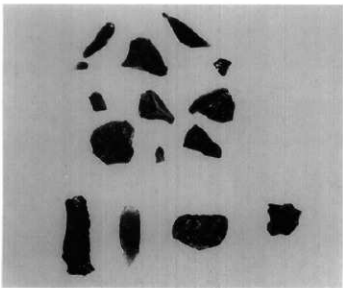


写真62 (使用痕のある) 黒曜石剥片(11~14他)

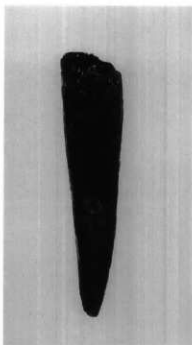


写真63 小堅穴389出土木製品(1)



写真64 小堅穴389出土木製品(2)

報告書抄録

ふりがな	しばはらおねいせき							
書名	芝原尾根遺跡(第1・2次発掘調査)							
副書名	平成7・8年度県営担い手育成基盤整備事業深山地区に伴う緊急発掘調査							
巻次								
シリーズ名	原村の埋蔵文化財							
シリーズ番号	40							
編著者名	澤谷昌英 石川美樹							
編集機関	原村教育委員会							
所在地	〒391-01 長野県諏訪郡原村6549番地 1 ☎ 0266-79-2111							
発行年月日	西暦 1997年03月							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒			
芝原尾根	長野県諏訪郡 原村中新田	3637	68	35度	138度	第1次 19961211 ～ 19961221	800	平成7年度県 営担い手育成 基盤整備事業 深山地区
				56分	14分	45秒		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
芝原尾根	集落跡	旧石器時代 縄文時代	小竪穴 415基		スクレーパー 使用痕 のある剥片 石核 縄文土器破片 石皿 凹石 打製石斧 石錐 逆茂木の先端部分		小竪穴を415 基発見したが、 うち31基は落 とし穴であっ た。住居跡が 見つからなか ったことと、 遺跡の立地な どから、本遺 跡は狩り場で あったと推察 することができる。 また、落とし穴より 2点の逆茂木 が見つかつて いる。	

原村の埋蔵文化財40

芝原尾根遺跡

(第1・2次発掘調査)

平成7・8年度県営担い手育成基盤整備
事業深山地区に先立つ緊急発掘調査報告書

発行日 平成9年3月

発行 原村教育委員会

〒391-0192 長野県諏訪郡原村

印刷所 もえぎ企画書籍

〒394-0043 岡谷市御倉町2-21

0266-22-4892

